
Fate/Zero ~ 未来を観るモノ ~

監査機未起

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / Z e r o 　　〈未来を観るモノ〉

【Nコード】

N 2 6 3 7 Y

【作者名】

監査機未起

【あらすじ】

第四次聖杯戦争。

七人の魔術師の英霊が集い競い合う儀式。

そんな聖杯戦争に、本来関わるはずのない少年が参加を決断する。

……自らが見た『死』の未来を回避するために。

00 幕開け

未来は未定。

何が起こるか分からない。

そんな風に言う人がいるが、それは未来を知らないから言えるだけの戯言だ。

箱を開けてみなければ中の猫が生きてるか死んでいるかどうか分からないだとか、読んでみない限り本の内容が分からないだとか言っている様なもの。

一度観てしまえば確定するというのに……いや、既に確定しているというのに目を逸らして。

観ていないから、知らないから、未来は定まっていないだなんて言えるのだ。

……僕と違って。

僕には未来が見える。

今日先生が遅刻してくる事も、数日後クラスメイトが失踪する事も、更にその先に自分が大勢と共に炎に包まれ死ぬ事も。

未来に希望は無い。 人生に期待はしていない。

「……なら、なんで生きてるんだろうな」

未だ年が二桁に至っていない小学生の身でありながら、僕はもう絶望しか観えない。

友達も作る気なんておきないし、遊びにふける気にもなれない。

やる気ゼロ。

人生を楽しむ気もゼロ。

ただ死を待つだけ。

「朝っぱらから校門前で何言ってるのよ、あんたは」

校門前、登校中。

そんな状況で突っ立ちながら訳の分からない言葉を発した僕を、皆がチラ見、または無視をする中、ただ一人だけが違う行動をとっ

た。

「……遠坂か」

遠坂凜。

クラスメイトであり、僕と同じく大人っぽいという評価を受けている。

……もつとも、それは教師達大人からのモノであり、仮面に過ぎない。

いわゆる仮面優等生。

本性はもつとがさつ。

将来は、その仮面ももつと性能が上がるんだろうが、今は未熟。

クラスメイトのほとんどのバテしており、そんな環境ゆえに本人も仮面を被る作業を省く時が多々ある。

「遠坂はさ、未来は不可避だと思っつか？」

「どういう意味？」

「絶対に当たると言われてる占い師に、死ぬって言われたらどうするかって感じの話」

「どうもしないんじゃないかしら」

「……あのな、絶対に死ぬと言われてるんだぞ。普通はもつと」

「その占い師が絶対に当たるかどうかなんて、私には知ったことじゃないし、そんな未来はお断りよ。私の未来は私が決めるから」

……こいつは、まったく。

魔術だなんて以上側の人間だから、普通とは違う考え方でもしてくれるのかと思ったら、普通に前向きな考えだ。

実際にそんな場面に直面すれば、多くの人にとっては実行できない、口だけの考え方。

そして、この遠坂に限っては、そのまま実行し、拳句は未来を変えてしまいたいような、理想的な考え方。

僕にはとてもじゃないが真似できない。

「何かに迷ってるのなら、うじうじしてないで、行動に移してみたらどう？」 瀬田くん

「……そうかもな」

今まで未来を変えようとした事は何度かあった。

だが、いつどこで起きるかも分からない未来を前に成す術もなく、結局は観たとおりの未来をなぞる。

それを繰り返す度に、未来は変えられないと結論を出し、諦めていた。

コントロールの出来ない未来視。

何の前触れも無く突然観える未来。

いつ、どこでのか分からないその未来を僕は、いつしか映画を観るかのような感覚で観るようになっていたのだ。

あくまで他人事。

誰かが傷つく未来を観ようが、「あ、そう」と流す様に。

感情的になっても、どうせ無駄なのだからと。

でも 偶には、最後までい足掻いてみるのもありかも知れない。

僕が死ぬか、死なないか。

それは、未来が回避可能か回避不能かを決めるのと同意。

僕は後者だと決め付けていたが、もしかしたらがあるかもしれないと奇跡を夢見ても損は無いだろう。

どうせ死ぬなら、その瞬間まで希望を抱いてみても。

この世には魔術だなんてファンタジーなモノが存在している。

炎を出したり、空を飛んだり……詳しくは観た限りは知る事が出来なかったが、存在するのは確かだろう。

もつとも、本来なら一般人には知る由も無く、知つたらなば神秘の秘匿とかなんとかで殺される事もあるらしいが。

もしかしたら、僕も知っている事がバレたら殺されるのかもしれない

ない。

……まあ、そうなったら、そうなたで僕が観た未来とはズレる事になるが。

僕は、聖杯戦争という魔術の儀式による火災に巻き込まれて死ぬ事になるのだ。

僕が観た未来ではそうなっていた。

体格は丁度今くらい。

だから、成長した遠坂が参加していた聖杯戦争は、また別モノなのだろう。

偶に観る聖杯戦争は、時代背景が微妙に違うモノが二つ混ざっていた。

そして、どたらかと言うと、遠坂が参加する別の聖杯戦争の未来の方が多いい気がする。

「さてと……」

ここは冬木市深山町のある場所。

今は夜中であり、元々空き地な事もあってか人目は無い。

そんな場所で、魔方阵を描き終えると、一旦立ち上がり見下ろす。

僕は異常だが魔術師ではない。

先祖までは知らないが、両親はサラリーマンと専業主婦という、至って普通の家庭。

そんな環境で育った僕が魔術を使えるはずが無い。

だが、ダメモト。

あくまで、もしかしたらの思いで、かつて観たサーヴァントという聖杯戦争における使い魔召還の儀式を試してみようと、こうして準備しているという訳だ。

詳細はあやふや。

確か、こんなだったよなという実に曖昧でいい加減な魔方阵。

これで召還が成功したら、笑ってもいいくらいに。

「まあ、せつかくだしやるか」

魔方阵を前に右手を差し出し、記憶に残る動作、台詞を真似る。

01 参戦の決意

全身が熱い。

焼けるように、今にも燃え尽きるかの様に。

おまけに身体中の体力と気力が根こそぎ持っていかれた様な疲労感であり、意識も朦朧、視界もぼやけてくる。

そんな思考が麻痺しそうな状況でも、まさか本当に召還されるとは……と、驚愕の意を隠せない。

魔術師でもない自分が、記憶に残っていたおぼろげな魔方陣と呪文で呼び出せてしまったのだ、無理もない事だろう。

辺りを見渡すが、いつも通りの景色。

違っているのは目の前にいる、異質な人型の存在だ。

暗い背景、たよりなくぼやける目……そんな条件でも、はっきりと目視出来る。

サーヴァントと呼ばれる使い魔であり、その正体は歴史や伝承に残る英霊。

普通に生きていたら、まずお目に叶えない。

……まあ、未来視で観た事はあるが。

赤い双刀使いとか、牛で空飛ぶ大男とか、やたら目立つ金の鎧を着た奴とか。

正体は知らないが、いずれも普通ではなく、聖杯戦争に参加するサーヴァントだと推測している。

観た事があるのは他にも何人かいるが

改めて自らが呼び出したサーヴァントを見る。

微動だもせず、こちらの動きをうかがうように両の目で見つめてくる。

もつとも、身長からして僕のほうが小さいので完全に見下ろされているが。

観た事の無い金髪の騎士風の、おそらく少女。

どうみても僕の方が幼いが、それでも彼女も少女に分類されるだろう位に年若い。

ただ、身に纏ってる空気が、その幼さを打ち消し、騎士の様だと思わせている。

それにして、いつまで見つめているんだと、何か話してはくれないのか……と、無言に堪えられなく目を逸らした所で気づいた。

彼女の問いに僕はまだ応えていなかったな、と。

「あ……多分僕がマスターです。瀬田未^{せだ}来^{みらい}って言います」
身体は不調だが、呂律は回る様だ。

現実感がまだ掴めていなく、無意識に敬語調になったが。

「了解しました。では、これで契約は完了ですね」

今までの間など無かったかのように彼女は僕の返事を受けて返す。淡々とした事務的口調に、無表情。

これから上手くやっていけるのか不安だ。

というか、これからどうするかが未定だ。

これはモノのためし、ダメモト、とどのつまり思いつきによる召還だ。

聖杯戦争に参加する確固たる意思も目的も無い。

そんなモノが小学生にあるはずが無い。

殺しあうなんて無理に決まっている。

僕はただ 生きたい、そう思ってしまっただけなのだから。

避けられない死、それは一種の運命であり、それを覆すにはどうしたらいいだろうと悩み、試してみただけ。

勝利すれば願いが叶うという響きにつられて。

ただ、死を待つ位なら……と。

「えっと、あなたの名前は？」

サーヴァントである彼女に尋ねたい事があった。

それは名前ではなかったのだが、呼ぶ際に不便に感じたので念の為。

「キャスター、そう呼んでください」

「キャスター？ それって魔術師って事ですよね？」

目の前の人物はどちらかというところ、さっきから感じている様に騎士であり、魔術を使う様には見えないが。

「ええ、一応。ですが 私は魔術師ではありません」

「……え？」

「魔術は一切使えないと言う事です」

「……じゃあ、なんでキャスターなんですか？」

魔術師だからキャスター。

魔術が使えるからこそそのキャスター。

そう思っていたのだが、違うのか？

「私にも分かりません。聖杯が間違えたのではないのでしょうか」

……無言。

いや、沈黙。

正直な所、なんて返したらいいのか、人生経験が十に満たない僕には分からない。

聖杯って一体何なのだろうか疑問で一杯だ。

魔術師で無い人間の、適当な魔方陣と呪文で呼び出す事が出来、召還されたサーヴァントはクラス違い。

こないだいい加減な事でいいのだろうか、聖杯戦争。

「あ、じゃあ、やっぱり騎士なんですか？ 武器とか持っていたり…」

……

「いえ、あくまでキャスターなので武器は持っていません。元々武器を持って戦う性質たちでもありませんし」

まさかの魔術無し、武器無しときた。

あれ、いよいよ雲行きが怪しくなってきたぞ。

「えっと……じゃあ、どうやって戦うんですか？」

「戦いません」

きっぱり。

断言と言って相違無い位にキャスターは言った。

まさかの連続、戦わないサーヴァント。

「ただこの聖杯戦争を無事に、何事も無く終わらせる。それが私の目的ですから」

一体何しにこの英霊は召還に応じたのだろうか……そう疑問に思っていた僕の思考を見透かしたかのように言葉を加えるキャスター。その目は真っ直ぐで、その言葉は紛う事無く本心だろう。

聖杯戦争を無事に終わらせるといふ、どう考えたって彼女には利の無い願いが。

「……あれ、無事に終わらせる？ そう言ったのか……じゃなくて、言っただんですか？」

「ええ」

「じゃあ……キャスターは、この聖杯戦争が無事に終わらない事を知ってるのか？」

「……ええ」

肯定。

その一言が、僕に希望を見出させてくれた様に思う。

彼女の目的が叶う……つまり、何事も無く聖杯戦争が終われば、あの明らかに無事に済まない悲惨な大火災は起きない。

そして、そうなればその火災で死ぬという僕の未来は否定される。

「……そんな運命を捻じ曲げるような事が可能だと？」

「ええ、私はそう信じています」

「はは……」

思わず顔が崩れた、笑いが漏れた。

身体の不調なんてもう忘れた。そんな事どうでもいい。

「乗った。無事聖杯戦争を終わらせよう」

笑顔を浮かべ、希望を抱き、僕は右手を上方に差し出す。

指針は決まった。

やってやるうではないか。

未来は回避可能だと、不確定だとこの目で観て証明してやる。

その為の相棒が僕にはいる。

共に未来を変えんとする相棒が。

「ええ」

キャスターは差し出した僕の手を握ると、暖かい口調でそう応えた。

02 戦場予定地散策

そこは赤で満ちた世界だった。

一面が火で包まれ、つい直前までであった人の呼吸も感じられない。せいぜいあつて虫の息。

見慣れたはずの町が全くの別物に変わり果てていて、そんな中に紛れるように転がっていた僕も別物の様だった。

息は当然無く、ピクリとも動かない。

千切れた右腕、砕けた両足、焦げた背中。

そんな状態で生き延びていたら、それはまさしく奇跡であり、呪いだ。

……そんな光景を僕は、今まで何度も繰り返し観て来た。

僕が生きる未来などありえないと絶望するには十分なくらいに。

「昨日は、ありがとうな」

「……何の話？」

「いや、なんでも」

翌日の朝、僕は普段通り、何事も無かったかの様に通学し、教室に。

そこで先に来ていた遠坂に礼を述べながら、自分の机に鞆を下ろす。

遠坂との会話が無ければ、サーヴァントの召還をしようだなんて思わなかっただろうからな。

出来る事なら、遠坂から聖杯戦争について詳しく聞けたら良いのだが、何で聖杯戦争を知ってるんだとか聞かれたり、マスターだってバレたりしたら面倒なので今は保留にしておく。

目標の一つに、誰にも聖杯戦争参加者だとバレないというモノを

設けているからな。

戦えないサーヴァントに、魔術を使えない無力な小学生マスター。バレたら、その時点で脱落に等しい。

僕は戦う必要なんて無く、ただ生き延びられればいいのだから。

僕がやるべきことは、あの炎……大火災の原因を突き止め防ぐ事。そして、他の参加者達から逃げ切る事。

その二つだ。

『周囲にはサーヴァントの気配、及び不審な動きはありません』

『了解。ありがとうな、キャスター』

『いえ、これ位の事しかできませんから』

キャスターとの念話。

口に出さず、意識下で直接会話が出来るという便利な力。

マスターとサーヴァントが繋がっているからこそ、素人の僕にも出来る可能なモノらしい。

ちなみにキャスターは現在霊体化中。

もし、普通に声を出して会話をしたならば、独り言を呟く怪しい奴に周囲の評価が一変してしまう。

……と、一人でぶつぶつと考え事をしていると、チャイムが校舎中に響き渡る。

チャイムが鳴ると、校庭や廊下で遊んでいた人達が教室に吸い込まれて行き、今までおしゃべりで喧騒としていた校舎が静寂に包まれる。

僕らの教室も、先生が入って来た事で、より静かさを増した。

それから朝の会、一時間目、二時間目と授業が進み給食の時間。

今日はカレーがメインなせいか、皆食べるのが早く、おかわりも多い。

普段は残したりする人も、今日ばかりは例外というまでに平らげていく。

おかげで配膳用の鍋の中身は空だ。

『これが、この時代の食事なのですな』

『うん。キャスターの時は違ったの？』

『……ええ』

どこか哀愁を漂わせる声。

栄養も整い、皆が集まって騒ぎながらも楽しく食事する。

そんな風景は、キャスターがいた時代には夢の様だったのかもしれない。

戦時中は、ろくに食事も出来なかったと聞くし、遙か昔の英霊がいた時代では、どれが更に酷かったという事もありえるだろう

そう考えると、僕は改めて両手を合わせ『いただきます』と、感謝を述べてからカレーを口に運んだ。

そして、黙々と食事を進め、完食すると『ごちそうさま』と頭を垂れた。

『ところで、サーヴァントって食事はしなくていいの？』

スプーンを置き、食器の片づけをしながら疑問に思ったことを伝えてみる。

『ええ、不要です』

『……そっか』

召還して以降、キャスターは常に無表情だ。

感情的には成らない。

そんな姿を見ていて、子供心ながら、キャスターも一緒に食事でもすれば笑みを零すんじゃないかと期待したのだが……こつもきつぱりと言われると、次の言葉も引っ込んでしまった。

『この後はお昼休みでしたよね』

『あ、うん』

『では、学校を終えた後の今日の動向について、少々話し合ってくださいませ』

『この町の探索？』

『ええ。私はこの地理を把握していません。それでは今後に支障がでるでしょう』

『……分かった』

給食を食べ終わった僕は、校庭の片隅にある木の下で、キャストの念話をしていた。

誰も見ていないし、耳も傾けていないので、直接の会話でもいいのかもしれないが、念には念を。

一応魔術師である遠坂もいるのだから。

『でも、ごめんな。本当なら朝からやった方が効率が良かっただろうのに』

『いえ、マスターの日常を脅かす訳にいきませんから』

それでも僕はまだ小学生であり、加えて低学年。

両親はまだ健在。

学校を自主的に休み、町をうろつくのは厳しいというもの。

子供が平日の朝っぱらからうろついていたら、近所の人に目撃されて親に心配をかけてしまう。

おまけに説教も。

それは非常に面倒で避けられるのなら避けたい事だ。

『じゃあ、終わりの会が終わったら町を散策するって事で』

『ええ』

……という訳で、学校を出て、おやつが食べなくなるような時間帯。

霊体で見えないキャストを連れて、深山町を歩いて回った。

僕の家や、学校がある深山町。

ここは冬木という市を構成する町の一つで、もう一つが大きな川を挟んで東側には現在急速に発展中の新都。

至って特徴の無い地味な深山町に比べ、開発の進んだ新都は隣り合っているとは思えないぐらいに別物だ。

図書館はや公園、ホテルなどと充実しており、ビルやデパートなども出来つつある。

橋を挟んで別世界だ。

この橋も六六五メートルもあるので、繋がり自体薄い。

『あの、マスター』

『ん、何？』

『新都の方には行かないのですか？』

『えっと……遠いし』

お小遣いも無いので、交通機関も使えない。

歩いて行くにしても、小学生の短い足では、着いた頃には陽が暮れているかもしれない。

それに着いても、体力は底を尽きて帰ってこられないと思う。

『しかし、聖杯戦争が行われるのは冬木市、新都も含まれています。せめて一度くらいは様子見しておくべきです』

『……分かった。明後日は学校が休みだし、早朝から出かけよう』
弁当でも持参すれば、無賃で行って帰れるだろう。

両親には、友達と遊びに行くと言得する事としよう。

……個人的には、新都は嫌な予感がするから近寄りたくは無かったのだけだ。

何せ、最初に死を観たのは、新都に行った日の夜だったのだから、縁起としては良くない気がする。

『明後日ですか……』

『どうかした？』

『いえ、その日しか無理なのであれば、最善の注意を持って挑みます』

『え……あ、うん。頼みます』

キャスターの口振りが神妙そうだったので、つられて畏まった様に思ってしまった。

別に明後日じゃなきゃ絶対に駄目だと言っ訳でもないんだけどな。言い出すタイミングを完全に失ったけど。

その後も散策を続けたが、これと言って変わった事は無く、そんなこんなで帰路に着いた。

何事も無かった……と言えば何事も無く。

『サーヴァントが何体かこちらにいますね』

と、いうキャスターの言葉が以外は。

正確な場所は分からず、気配を感じた訳でもないらしい、根拠を感じない発言だったが、僕が不安になるには十分だった。

どうやら僕の住む町は、いつの間にか非日常の影に侵食されつつあるらしい。

……まあ、僕も非日常側だけ。

03 死の脅威はすぐそこに

約束の日。

特段早起きをした訳では無いが、休日に一人でただ歩くという行為は、せつかくの時間を浪費している気がしないでもない。

もっとも、正確には一人ではないのだが、相棒であるキャスターは霊体、歩く必要が無いのだ。

よって、とぼとぼと重い足取りで行進するのは僕一人と言うわけである。

『やはり交通機関を使うべきだったのでは？』

「……今更もう遅い。ここまで来たら意地でもって歩いて行く」

『むう……マスターの決定であるならば』

どこか納得しきれないキャスター。

どうもこうも、キャスターは家を出た時から交通機関を使う事を進めてきていたのだ。

効率が悪く、かつ疲労が溜まるのではと。

以前は小遣いが無いからと答えたが、今僕が背負うリュックの中には小遣い入りの財布が入っている。

行きと帰りの交通費の分だけ。

実は、母親が出発前にくれたのだ。

歩いていただったら心配だからと。

……ちなみに、両親には新都に住む友達の家遊びに行くという理由で説得出来た。

弁当までしつかり作ってくれた。

しかもチャーハン入り。

母には感謝が尽きない。

尽きないが あえて、受け取った小遣いは使わなかった。

何故なら使ってしまったら無くなるからだ。

せつかく手にした小遣い、向かうは新都。

だったら遊ぶしかないでしょ、この小遣いを有効利用して……との思いの下に、キャスターや母の心配を振り切って、徒歩で新都へ向かう事にした。

その結果はと言えば、半ば後悔している。

足は重いし、呼吸も辛いし、言ってしまうえばしんどい。

それでも、未だ歩き続ける事を選んでるのは、ただの意地だ。

キャスターには『今回は様子見であって、遊びに行く訳ではありませんよ』と、厳しく諭す様に注意されたというのに、今回は我が儘を通させてもらったのだ、今更疲労を理由に我を曲げたのでは格好が付かない。

……それに、こんな機会は今まで滅多に無かったし、今後もう二度と訪れないかもしれないのだから。

観た通り、この聖杯戦争で死んでしまえば。

『……マスター、あれが例の橋でしょうか？』

思考が負の方向に向かいだしていた所でキャスターの声。

自然と目線も地面を向いていて、加えて何を見ていたのかを脳が処理していなかった事に気づく。

いわゆる放心状態。

考え事をしていた事に加えて、疲労による意識の欠落。

目を見開き前を向くと、そこには長く大きな橋が川を跨いで存在していた。

深山町と新都を繋ぐ冬木大橋。

向こう側は見えない。

初めて目にした訳でもないのに、かつて無いほどその存在は大きく見え、何故だか知らないが感動的だった。

苦労してたどり着いたからだろうか、それとも、これを見るのも最後かもしれないと思ったからだろうか

少し考えてみても分からなかったが、そんな事はどうでもいい気がした。

広大な海へと流れる川や、青と白が調和している空、それらを眺

めていると疲れが吹き飛ぶ気さえした。

「橋まで来るのに大体三時間……帰りが思いやられるな」

腕にはめた時計はもう昼前を示していた。

短い足と貧弱な体力。

おまけに地図を見ながらの道のりだったのだ、時間がかかって当然だと思つ。

正直なところ、既に膝は笑い、肩で息をしている。

つまりは限界間近。

気は持ち直しても、身体ばかりはどうしようもない。

そんな状態なものにも関わらず、休憩を挟まなかったのは、一刻でも早く着こうという思い故で、途中見かけたバス停を利用しなかったのは、ただの意地。

『取りあえず、目的地はすぐそこなのですから一旦休憩を取りましよう。そして帰りは今度こそ交通機関を使いましょう』

「う……」

返す言葉が無いとは正にこの事。

遊び賃は節約出来た行き分だけになりそうだ。

もう良いかと、気を張るのを止め、地面に腰を落とす。

不恰好に、へたり付く様に。

そのまましばらく通行人を数えながら体力の回復に努めた。

「はあく、疲れた」

新都の街中で背伸びをする。

空はもう青から、夕焼けの赤へと染まろうとしてる頃合。

休憩後、対岸の挟にある海浜公園のベンチで弁当箱を広げて堪能してから、新都へと足を踏み入れた。

潮風が気持ちいいを通り越し、肌寒さを感じさせるものだったが、それでも気分転換にはなった。

気力と体力を、ある程度取り戻した僕は、キャスターを連れて新都を回った。

繁華街や、デパート、とにかく人通りが多かった。時折、食べ物の匂いにつられたが財布と睨み合った末に諦めた。わずかな小遣い。

何に使うにしても、一回きりで無くなる事だろう。

そうやって街を歩き回っている内に、一円も消費しないまま日が暮れ始めるまでに時間が経ってしまった。

そろそろ帰らなくては親が心配する。

……が、せつかくなのでこのお金を何かに使わなければ勿体無い気がしてならない。

このまま帰るのは気が引ける。

それに

『まだ、駅付近には近づかない方がいいですね』

と、キャスターからの警告もある。

どうやら、今日は運が悪い事に、どこかのサーヴァントが気配を隠すどころか挑発する様に放ちながら街を練り歩いている様で。

それを察知したキャスターの助言の下に行動をしている。

さつさと引き返すのも手だったが、次にいつ新都に来れるかも分からないので散策は予定通り続行。

というより、キャスターは基より、こうなる予感がしていたそう
だ。

それならそうと言って欲しかったが、上記の理由より警戒を怠らない決意を持って今日に至ったらしい。

しきりに交通機関を使うように促していたのも、下手に体力を使ってしまうっては危険だからと危惧していたからだったのかもしれない。

もしそうなら、キャスターには余計な心配と神経を使わせてしまった事になり、申し分けない気がしてくる。

『じゃあ、もう少しここで時間を潰そうか』

『ええ』

観光をしているだけの様で、要所要所は粗方見回った。

キャスター曰く、聖杯を降ろすにおいて適した場所がこちらに二箇所ほどあったと。

ちなみに深山の方にも二箇所。

聖杯を降ろすというのが今一分からなかったが、聖杯戦争という儀式を完成させるという認識で構わないとのことらしい。

もっとも迂闊に近づかない方が良いと言う事で、直接足を運んではいないが。

『でも、なんだか一人だけ楽しんでて悪いね……。キャスターは色々とやってくれてるのに』

『いえ、それが私の役目ですから』

出来る事なら実体化をして、一緒に楽しめたら良かったんだけど、そんな事をすれば他のサーヴァントに気配を感知されてしまうと却下。

続いて、例の挑発してくるサーヴァントまで現れてしまったのだから、なおさら実体化する訳にはいかなかった。

それに、唯でさえ僕が未熟なせいで魔力が少ないのだから、無駄な所で浪費している場合では無いとも。

どうやら僕にも一応の魔力はあるらしいが、非常に心もとない程のモノ。

だから普段から無駄使いしない様に、負担をかけないように実体化はせず霊体で行動しているのだ。

最後に実体化したのは、召還した最初の夜以降一度も無い。

霊体でも薄っすらと姿は見えるけど、なんだか寂しい。

身を守るためなら仕方ないけど。

『しかし……』

改めて辺りを見渡してみる。

子供から老人、外国の人……多種多様な人達が行き交ったり、談笑したりしている。

こんな中にも、人という存在を超越した英霊と呼ばれるモノが混じっている可能性もあるのだから、世の中奇妙な事もあるものだ。もしすぐ側を通り過ぎても、僕は気づくことは出来ないだろ

「……って、あれ？」

ふと、自分の横を見ると、そこにはさっきまでいたはずのキャスターがいない。

もう片方、後ろ、上、視線を泳がせ辺りを捜すが見当たらない。どういふ事だろうか。

こんな事態は初めてだ。

キャスターが今まで僕の側を離れた事は無い。

少なくとも目につく範囲内。

だからこそ、こうして共に散策をしていたのだ。

いざという時に守れるようにと、キャスターの案で。

『一体どこに』

と、さ迷わせる視線が、ある一点を捉えて停止。

それは金髪の女性。

すぐ近くにいて、そして接近して来る彼女を僕は知っている。

キャスターにどこか似ている……が、全くの別人。

そう、彼女は

「セイバー……」

口にした瞬間、空気が凍った気がした。

僕は身体に力が入らず、身動きが出来ない。

そのくせ心臓は悲鳴を上げるようであり、冬だというのに場違いにも額から流れる汗が目に入り鬱陶しい。

しまった、と口にする余裕も無い。

小さく細い一言だったが、相手に聞こえたかもしれないと不安と恐怖が身を襲う。

そうして一秒、二秒と経過。

その一秒がやけに長く感じ

『もう大丈夫ですよ』

キャスターの声を聞くと同時に、糸が切れた様に膝から崩れ落ちた。

安堵の息を漏らす。

『反応はしましたが、かすかに聞こえた程度だったのでしよう。隣にいた女性と二言程会話を交わした後、素通りしていきました』

周囲の人達が何事かと、視線を寄せてきたので、大丈夫ですと何とか手を突きながらも立つ。

『向こうが気づくより前に、私も距離を取ったので、サーヴァントがいる事にも気づかなかったでしょ』

呼吸を落ち着かせ、キャスターの言葉を理解する。

色々と情報はあるが、要するに……僕は助かった。

何事も無く危機は去っていった。

そういう事だ。

「はは……諦めていたようで、諦められてなかったんだな、実際は」

『……何の話でしょうか？』

「生きる事」

自分の死を観て、絶望して、それで人生を諦めていたと思っていた。

死は必然であり、怖くも何とも無いと。

……だと言うのに、いざ死の危険を間近に感じると、こつも心と身体は恐怖で満ちるのかと驚いた。

知らない間に僕を炎が包み、命を奪い去って行ってしまふ様な錯覚に陥って。

そうして気づいた。

僕はやっぱり死にたくないのだと。

04 覚悟の確認

『しかし、申し訳ありませんでした。突然消えるようなマネをして』
『……いや、助かった。そうしなきゃ危なかったんでしょ？』

サーヴァントというのは、霊体、実体を問わず、互いの気配を感じ取ることが出来るらしい。

索敵能力には個人差があり、キャスターがセイバーより先に気づいた事で、瞬時の判断で距離を取ったのだろう。

そうしなければ、接触は避けられなかった。

『知らせる余裕もありませんでしたし、変に知らせて警戒させてしまふより、自然体でいた方が目をつけられにくくすると判断したのですが……マスター、どうしてアレがサーヴァントだと、しかもセイバーのクラスだと分かったのですか？』

『あ……そう言えば、まだ言っていなかったっけ？』

迂闊だったというか、うっかりしていたというか。

『何の事でしょうか？』

『僕の力の事』

キャスターは基本無口だ。

口数は少なく余計な言葉を話さない。

会話といえば、聖杯戦争において必要だと思われる程度のもの。

おかげで中々打ち解けられず、キャスターは常に堅苦しい言葉遣いだ。

そのため、僕がどうやってサーヴァントを召還したのかも、どうして聖杯戦争に参加しようとしたのかも尋ねてこない。

おそらくキャスターにとっては聖杯戦争には不必要な情報だと判断したのだろう。

『力……ですか？ 魔術を使えないのは承知していますが……』

『うん、確かに魔術は使えない。けど、その代わり僕には未来が観える』

『未来……』

『その力で、未来に起きる聖杯戦争を観たんだよ。召還の儀式もそれを真似た』

『……なるほど、アレがセイバーだと分かったのは観て知っていたからという訳ですか』

『そういう事』

納得した様子のカスター。

どうせなら、もっと早く知らせておくべきだった。

そうすれば、カスターならそれを踏まえて色々な案を出してくれていたかもしれないというのに。

『では、他のサーヴァントの情報も？』

『うーん、いくつかあると思う。別の聖杯戦争と混じってるけど……って、あれ？』

あのセイバーは、今まで未来視で何度か観た事がある。

その内の一回が、遠坂と一緒にいた気がする。

今の遠坂ではなく、成長した。

つまりあのセイバーは、今回ではない別の聖杯戦争の方のサーヴァントと言う事になる。

だが現実には、今まさに顕現しており、この目で見たばかり。

これは一体どう言う事なのだろうか？

『どうかしましたか？』

会話の途中で黙り込んだ僕を見かねて、カスターが尋ねて来たので、今抱いている疑問を素直に話す。

すると、『単に両方に参加していただけでは？』との返答。

もしくは、単なる勘違いと。

『あの、マスター』

『……ん？』

『以前から疑問に思っていたことがありました。……ですが、サーヴァントの身で尋ねるのはおこがましいと思い、今に至ります。もし、差支えが無ければよろしいでしょうか？』

真剣な眼差し。

それは霊体でも変わらない。

どうみても雑談的内容ではないのは確かだが、それでもキャスターの突然の申し出には驚いた。

さつきも述べたように、余計な干渉はしてこないタイプだと思っ
ていたから。

『いいよ。僕も前から思っていたけど、僕のほうが遥かに年下なん
だし、そんなに気を使わなくてもいいよなんだか落ち着かない』

『……分かりました。これからはそう心がけます』
と、相変わらずの口調。

分かっているのやら、分かっていないのやら。

『ではお聞きします。マスターはどうして聖杯戦争に参加しようと
？ ……言っでは何ですが、まだ幼いのですから』

……訂正。

口調こそ変わっていないが、気を使う度合いが確実に下がっている。
そのほうが、気が楽でいいけれど。

『いやあ、実は参加するつもりなんてなかったんだよ。気まぐれに
召還の儀式をやったら出来ちゃった……みたいな』

『……………はい？ 今何と？』

『えっと、簡単に言っていると覚悟も目的も無く召還してしまったって事』
無言。

沈黙。

ポカンとした様子のキャスターは貴重と思う。

見る見る険しくなる視線が痛いけど。

『つまり、参加する意思は無く、事故の様なものだったと？』

『まあ、そんな感じ』

『……………何と言う事だ』

『キャスター？』

常に淡々と感情の籠っていない様な喋り方だったのが、落ち込む
ような後悔するような悔しさ紛れの声で漏らす。

額に手をあて、顔を隠すようにして。

『考えれば分かる事でしたのに。この平和な国、平和な時代で、子供が自ら闘争に関わろうとするなど……』

それは、客観的に観ればおかしいと気づく事、聖杯戦争に参加するという事は、殺し合いに身を投じるという事に等しい。

そんな環境に、非力で未熟な子供が飛び込むなんて、この日本ではそうそうないだろう。

一般的な感性で育てば、何人の人間が自身の目的の為に人を殺す事が出来るというのか。

感情に任せた突発的な殺人は数あれど、計画的な殺人はそれに比べたら各段に少ないと思う。

冷静な状況で人を殺せる人間なんて、よっぽどの覚悟があるか壊れているかのどちらかだ……と、というのが僕の見解。

勿論、世界は広く、殺す事に躊躇いを持たない子供も多くいるのだろうけど。

……生きる為に。

『キャスターが気にする事じゃないよ。自業自得だし』
『ですが』

『それに、むしろキャスターには感謝してるくらいだ』

自分のせいで子供の命を危険に晒すようなマネをしてしまったと……そう口にしそうだったキャスターの言葉を遮る。

キャスターは明らかに自分を責めている。

どう見ても非があるのは僕の方だというのに、負い目を感じて。
『え……』

『確かに召還した時……いや、キャスターの言葉を聞くまでは、聖杯戦争なんてやる気が無かった。どうせ無駄だって諦めてたから』

無駄、無意味、無価値。

未来は予め決まっただけで、何をやっても変わらないと。

『僕は、自分の死を観たんだ。三年位前から、何度も。この聖杯戦

争に巻き込まれて死ぬのを』

炎の海、炎の影。

その地獄の様な光景は、そこがどこなのかすら分からない程滅茶苦茶。

おかげで、自分がどこで死ぬかまでは知らない。

そのくせ身体は丁度今くらい。

そして、その場所であるセイバーのサーヴァントが剣を振るう姿を観た。

それは炎が満ちる前。

振るった後は満ちた後。

だから僕にとってあのサーヴァントは死の予兆みたいなもので、死神同然だった。

そういえば、聖杯戦争だとか魔術だとか異常に関わる未来を観る様に成ったのは、その光景を観てからだったかもしれない。

繰り返し、積み重ねて異常な未来を観ることで、それを受け入れるようになった。

『でしたら、尚更参加すべきでは無かったのでは？』

『何をしても未来は変らない……そういう考え方だからね、僕は。だから参加しようが、参加しまいが僕は死ぬ。そう思ってる』

だから、死を受け入れ、生を諦めた。

……まあ、心の奥では生きたいと思っていて、これは強がり過ぎなかったと先程思い知ったけど。

死は避けられないのだから、自分を誤魔化すしかなかったのだ。

『でも、キャスター。君は言った。聖杯戦争を無事に、何事も無く終わらせる……と。それが何を知っていて、どういう意図で言ったのかは僕は知らない。けど　その言葉にかすかな希望を抱いたんだよ。もしかしたら、未来が変わったりもするんじゃないかって』

『……そう言うことだったのですか』

『うん、だからこれからも今まで通りで頼むよ』

『了解しました、マスター』

僕らは再び、互いに手を取り合う。

これから共に未来を切り開くために。

『あ、そうだ。キャスターの真名って何だっけ？』

『あ……。そう言えばいい忘れてましたね。私は』

』

04 覚悟の確認（後書き）

【CLASS】 キャスター

【マスター】 瀬田未来

【真名】

【性別】 女性

【身長・体重】 159cm 44kg

【属性】 秩序・善

【ステータス】 筋力C 耐久C 敏捷B 魔力B 幸運C 宝具A
++

【クラス別スキル】

陣地作成：

魔術師でない為使用不可。

道具作成：D

魔術的な道具を作成する技能。

【固有スキル】

啓示：A

『直感』と同等のスキル。

直感は戦闘における第六感だが、『啓示』は目標の達成に関する事象全て（例えば旅の途中で最適の道を選ぶ）に適応する。

根拠がない（と本人には思える）ため、他者につまぐ説明できない。

カリスマ：B

軍団を指揮する天性の才能。

戦場で旗を掲げ突撃に参加する姿は、兵士の士気を極限まで高め、軍を一体のものとする。

彼女はカリスマのおかげで根拠のない『啓示』の内容を他者に信じさせることが出来る。

対魔力：C

揺るぎない信仰心によって抗魔力を発揮する。

ただし、魔術を逸らしているだけなので、広範囲魔術攻撃の場合、助かるのは本人だけである。

教会の秘蹟には対応しない。

聖人：B

聖人として認定された者であることを表す。

【宝具】

名称：

ランク：

詳細：

種別：

：

最大捕捉：

名称：

ランク：

詳細：

種別：

：

最大捕捉：

05 水面下で動き出す聖杯戦争

新都へと足を運んだ翌日。

朝の日差しが窓から差し込む中、瀬戸未来は自室のベッドに全身を委ねていた。

セイバーとの遭遇の後、より慎重に新都を抜け出す為、自らのサーヴァントであるキャスターの助言に従い、何とかの思い出バス停へと辿り着いた。

例の挑発するように気配を振りまきながら街を徘徊していたサーヴァントにも接触せずに済み、緊張の糸が切れたのか、張り続けるのに疲れて緩んだのか、バスに揺られながら熟睡。

近所のおばさんに起こされなければ、乗り過ぎ所だった。

そんなこんなで体力も気力も底を尽きる直前まで使い果たした未来は、夕飯も食わずにリビングのソファでまた熟睡。

今度は母親が大声で起こそうとしてもピクリとも動かないまでの意識の手放しぶり、諦めた母親の指示の下、父親の手によって部屋まで運ばれ、そのままベッドに落とされた。

そうして、夜は更け、陽が昇り、今に至る。

「ん……」

目をしばしばと瞬かせながら、太陽の眩しさに目を細める。

まだ、身体も脳も完全に起ききっていない。

本格的な覚醒までは、ほんの少し程の所要時間が求められる。

準備段階なのだ、まだ。

だから、まだ身を起こす事は出来ず、肌寒さを誤魔化す為に布団を深くかぶり直すのも仕方ない事なのだ。

あと三分、あと五分……。

『……マスター。今日は学校なのでは？ 先程から母君が起きる様にと叫んでおられますよ』

「もっ少しだけ……」

『いえ、そういう惰性は自らを駄目にしてしまいます。朝は一日の始まりです、しっかりとしてください』

「うう……」

キヤスターのきつめの声による諭しで、渋々のっそりと身体起き上がる。

僅かばかりの反抗とでも言うように呻き声を残して。

疲労感の方は癒えている。

筋肉痛もどうやら免れたようだ。

ただ起きる事へのだるさが今は意識の大半を占めていた。

……もつとも、脳が覚醒するにつれて、その割合は減少し、違う問題が急速的に支配していつているのだ。

「……また観たんだ」

『観たとは……もしかや昨日言っていた未来視ですか？』
肯定。

首を縦に振り頷く。

それは暗い倉庫街のような場所。

月が地を照らし、更には人影をも映し出した。

二つの影はぶつかり合い、音を、光を、風を巻き起こす。
剣と槍。

創作のような壮絶で人知を超えた業の応酬。

剣を構えるのが、あのセイバー！

聖杯が呼び出した、人の手の届かない存在である英霊。

それと対峙するのはおそらく同様に英霊。

武器から察するにランサー！

二人の戦いは熾烈を極め、激しさを増し 更に盛り上がるという所で、神獣の様な神々しい二頭の牛に引かせた乗り物に乗った大男が乱入し、一対一の死闘に見事なまでの水を差してみせた。それからは正に混沌と呼べる様な光景。

金色のサーヴァントに、黒を纏ったサーヴァント。

五人の英霊が一カ所に集い そこで未来視は終わった。

その後どうなったのかは、未来には知る由がない。

「話を聞く限りセイバー、ランサー、ライダー、アーチャー、バースーサー……私とアサシンを除く全てのサーヴァントが一同に会する訳ですか」

「……多分ね」

自信が無さげで、曖昧なのは、別に未来視に自信がない訳ではない。

単に、観たモノが今回の聖杯戦争ではなく、更に先に起きる別の聖杯戦争である可能性も捨てきれないというだけである。

成長した遠坂凜が参戦する次の。おそらく今回のだとは思いつつも、記憶の中で二つ聖杯戦争が混ざり合って、どっちがどっちかの正確な判断我出来なかつたりする
たがら、多分としか言えない。

この未来視では、いつの未来かまでは手がかりとなる情報が紛れていない限り判断する事ができないのだから、なおさら。

観れる未来は断片的なモノが多いので、手がかりがあるのは稀。
最近、感覚的により先の未来であればある程、観る未来は短く僅かになっていのではと考えていたりもするが、その法則だと今回の比較的長めのモノは、かなり近い未来という事になる。

「倉庫街というのは、昨日見た所でしょうか？」

「……分からない。けど、そうかもしれない」

昨日新都へ向かう途中に寄った海浜公園。

その東側には、倉庫街が隣接して広がっていた。

プレハブ倉庫が立ち並び、港湾施設も兼ね備え、さらに東側には工業地帯がある。

そんな倉庫街。

聖杯戦争が冬木市を舞台とするならば、有り得ないことも無い。

むしろ可能性は大いにある。

あいにく流し身をした程度で、広い倉庫街の細かい所まで記憶しておらず、未来視で見た方も暗かった事に加えて、サーヴァントの

方に意識が行っていた為、はっきりと同じだと言える確証が無いのだ。

……と、未だベッドから完全に抜け出せていないままに、霊体であるキヤスターとあれこれ考えていると、とうとう母親が扉を勢いよく開け、ぶつぶつ言っていないでさっさと起きなさい と部屋へと押し入った。

そう言えば、目を覚ます前から部屋の前にいたんだっただなと思いつ返す。

母親にはキヤスターの声は届いていないので、寝ぼけた息子が独り言をぼやいているようにしか聞こえなかっただろう。

さすがにそろそろ起きなければ……いや、一応既に身を起こしてはいるのだが、世間一般、少なくとも母親はそれをただの屁理屈としかみなさ無いだろう事は知っているので、うたうたと文句を言わず、今起きると伝えた。

物事は穩便に済ませる事が大事なのだ。

とりあえず寝間着のまま部屋を出て朝食を取る事にした。

卵焼きに、ご飯、味噌汁、サラダ。

定番と言えば定番な気もしなくはないが、起きて早々の食事にしては量が多い。

一応皿や茶碗などの食器は、とうに食べ終え出勤していった父親のモノに比べれば小さく、配分も年相応に食べきれようと考えているのも分かってはいる。

だから文句を言わず食べるが、学校が始まるまでのカウントダウンが刻々と近づいている。

どうやら、思っていた以上に寝ていたようだ。

それにも関わらず、焦る未来に対し、母親は食事くらい落ち着いてしなと、学校に間に合うより朝食を優先させたのだ。

開き直っていつもより多め目に噛んで味わう事にした。

『マスター……あれを』

右手に箸、左手に茶碗、口には卵焼きな状態でキャスターが何かを伝える様に声を。

視線をたどると、そこにはテレビ。

どうやらニュースらしく、おまけに見覚えのある名前がテロップとして流れている。

爆発事件・冬木市ハイアットホテル壊滅状態

それは新都にあるホテル。

死者は出ていないらしいが、画面に映し出された惨状は、どんな事故が起こればそうなるんだと思える程に悲惨だった。

「怖いわよね……」

母親は思い口調で言う。

あれ程の事故なら、死者がでてもおかしくない。

当時ホテルにいた人間は恐怖で心が満たされたのではないだろうか。

野次馬ならともかく、平然と見ていられる人間は少数派だ……と未来は思う。

おそらく未来本人がその場にいたら、炎が目に焼き付き自分の死を連想したことだろう。

「例の連続殺人といい、近頃は本当に物騒になったわ……。未来も気をつけなさいよ」

心配し気遣い、やはり心配する母親。

今思えば、一人で新都に行くと言った時も、しきりに気をつけてと言っていた気がする。

母親だけではない、父親共々未来の両親は子供思いだ。

もし未来が死んだならば、この両親が悲しむ事は間違いない。

「うん、大丈夫」

だから明るく、元気よくそう応える。

おおよその確率、運命として未来は確実に大丈夫ではなくなる。だが、それでも心配させたくない、今だけは自分の死を忘れる。そして、叶うなら真に無かった事にしたいと。

祈るように。

「……食べ終わったし、着替えてそろそろ行くよ。遅刻するし」

朝食を平らげ、お茶を飲み立ち上がる。

チャイムが鳴るまでもう時間はないが、全力で走っていけば出席を取るまでには間に合う。

部屋に戻り、かつて無い速さで準備を終え、玄関に。

「じゃあ、行ってきます」

そうドアを開けながら言うと、いつてらっしゃいと気をつけての声が返ってきたので、うんと応えてドアが閉じると同時に駆け出した。

その結果は

「なんで今日に限って遅刻するのよ、あんたは」
惨敗。

努力むなしく遅刻。

忘れていたが今日は一日を使つての調べ学習で、前もって班分けはされていたのだけれど、一足二足遅かったのか、本来組んでいた班は既に出発済み。

取り残された未来は、見事に余り物の人数足りない班に。

つまりは遠坂の班に。

「色々あったんだよ。色々……」

元々時間がギリギリだったのもあるが、立ち止まりさえしなければ間に合っていた。

走る度に揺れる鞆が鬱陶しく、片手で抑えながらの全力疾走。

その最中にキャスターが思い出したかの様に言ったのだ。

『そう言えば、先程のニュースで冬木市湾岸地区の倉庫街でも原因不明の爆発事故があったと報道してましたよ』と。

未来が部屋に戻り準備をしていた間に。
そんな事を耳にしてしまえば、当然言葉を返したくなる。

だが、全力疾走中に会話をするのは極めて困難であり、未来には不可能だった。

よって仕方なく足を停止。

乱れた呼吸を一旦正すためにこれまた時間を費やして。

冬木の倉庫街……それは今日観たサーヴァント集結の舞台の有力候補。

あからさまな程に疑わしい。

観ていた光景では、爆発事故があつたらしい痕跡は無かった。

なら、爆発が起きたのは、未来視で観た後の時間。

つまり 既にサーヴァント集結は起こっていた、という事になる。

未来が寝ている内に。

……だが、そうなると少々おかしな事になってくる。

もし未来視が起きたのが昨日の内なら整合はつくが、そうでなければリアルタイム、もしくは事が起きた後に観た事になる。

それでは未来視とは言えない。

違う何か。

正直な所、未来はこの未来視の特性も正体も知らない。

考えても見当がつかなかった。

……と、そんな風に考え事をしていたら、結果の通り遅刻した訳である。

「色々って、どうせ寝坊か何かでしょ」

「……それだけじゃない」

いや、確実に布団に引きこもっていたのが最大の要因なのだが、一応それだけなら間一髪で間に合ったと計算しているので反論。

どう聞いても苦し紛れの言い訳にしか思えないが。

「ふん、私は良いけどコトネは？ こい……じゃなくて瀬田くんと一緒に大丈夫？」

「え？ あ、うん。大丈夫だよ、凜ちゃん。瀬田くん優しいし」
「というかもう決定してるしね。ほら、もう残ってるの僕らの班だけだよ」

「……誰のせいだと思っているのよ」

今日はクラス関係なく学年全員で行う調べ学習。

私達の住む街を調べようという主旨で皆が班に分かれて散り散りに散策していくといったモノ。

基本四人一班なのだが、遠坂の班は人数上の都合、そして遠坂と同じ班になる事を避けるモノの都合により三人班となり、更に当日である今日になって一人欠席。

二人になってしまいどうしようかと担任が悩んでいた所で現れたのが未来だった。

それから少々ごたごたがあり、気がつけば他の班はいない。

いるのはそろそろ出発したらどうだと目配せで訴えてくる担任達のみ

もはや遠坂の仮面なんてあつてないものだ。

「こうしてる時間も勿体無いし、さっさと行こ」

「ちよつと、待ちなさいよ。ほら、コトネも行くわよ」

一足早く動くだした未来に、後を追う二人。

すぐに並んで校門を出た。

「で、どこに行くんだっけ？」

班は予め歩く場所をそれぞれ決めている。

そうする事で下手に同じ場所に密集する事を避けているのだ。

突然の参加者である未来は、遠坂達がどこへ向かうのか知らないのだ。

「……まだ昼間とは言え、本当はこんな風に動き回るのは好ましくないんだけどね」

「え？」

遠坂の口から漏れた呟きの意味が分からなかったなのかコトネが首をかしげた。

対して意味を身に染みるほどに理解している未来は無言。

秘匿を基本とする魔術師は、昼間の、それも一般人の前でバレる様に事をお越しはしない。

だが、例外は何事にも存在し、万が一魔術師と英霊の闘争、聖杯戦争に巻き込まれる可能性は排除できない。

現に、すでに二箇所爆発事故が起きている。

犠牲者はまだいないとなっているが、実際に巻き込まれた人がいないとは言えない。

ホテルの宿泊者など迷惑極まりなく、運が悪ければ命を落としていたはずだ。

そんな闘争の舞台の冬木を、幼い子供が、かしこで教師が見張っているとはいえうるつき回るのは、事情を知るものからすれば、避けたいと思えることだった。

実際、遠坂凜なんかは巻き込まれないために実家を離れ、わざわざ電車で通学しているというのに。

「例の悪魔が冬木を去ったってニュースでやってたからじゃない？

あのまま事件が続いたらまた延期の予定だったらしいけど」

近頃連日として冬木を騒がせていた連続殺人犯。

その殺人鬼のせいで、集団下校等、警戒態勢を敷いていたが、その殺人鬼が冬木を遠く離れた地で連続として目撃された事で、一旦平常運行に戻った。

おかげで、一度延期して、また延期になったら予定に困っていた調べ学習をこの時期に予定通り行う手はずになってしまったわけだ。

「……なんだ遠坂、じつと顔を見てきたりして」

怪訝そうな顔でこちらを見つめてくる遠坂。

こちらとしては自然に話を繋いだつもりなのだが、もしかしたら不自然な点があったかもしれない。

「いや、なんでも」

……沈黙。

目標も無く歩く三人の間で言葉が止まる。

気まずい意気味での無言は結構に堪える。

「なあ、これ一体どこに向かってるんだ？」

「……さあ？ 適当に歩いてるだけだし」

「ちょ、おい。適当？」

「本当は柳洞寺周辺だったんだけど、行くのやめたから」

「……いつ？」

「さっき」

……そんな勝手な真似をしてもいいのだろうかと思った未来だったが、柳洞寺という場所には近づかない方がいいとキャスターから注意されていた事を思い出し、反論もせず黙る事にした。

柳洞寺は聖杯戦争において関係の深い場所でもあるのだから。

「あの……」

「ん、なに？ コトネ」

「あたし、行きたいところがある」

「そう。じゃあ、そこにしましょう」

コトネの提案を即効で了承。

どこに行くのかも確認せず。

「でも、どこに？」

「うーんとね、凜ちゃんの家！」

その一言で、三人の行き先は決まったも同然だった。

06 刻々と近寄る死神の鎌

それは遠坂凜にとっては非常にまずい展開だった。

殺人鬼がいなくなろうと、ここ冬木市は今普通の状態ではない。魔術師と人知を超えた英霊による殺し合い。

その舞台がまさにここなのだ。

だが、普通に昼間に街をうろつく程度なら支障はさほどないかと、柳堂寺行きを取りやめに出来た時点で楽観的に行こうとした。

別にどこに行こうが大丈夫だろうと。

だが、そこで思わぬ展開が生じた。

班の一人、友達であるコトネが自身の家へと行ってみたいと言って来たのである。

洋風の立派な家、そう以前聞いたコトネは単純に興味を持ち、同時に友達の家を見てみたいと思ったのだ。

もっとも、それは授業の一環である今やるべき事ではないのだが、コトネの思考はその問題に至らない。

「ええっと、今はちよつと家は無理なの」

「え……どうして？　もしかして迷惑だった？」

「いや、そうじゃなく、私もここ何日か帰ってないの。多分あと数日くらいも」

「帰ってないってどういう事だ？　家出か何かでもしてるの？」

「違うわよ。単に事情があつて使えないから、違う家から通つてるの。わかった？」

コトネに対しては柔らかい物言いだつたが、未来に対しては少々挑発的である。

これが同姓の友達と、ただ良く話す異性のクラスメートの違いなのだろう。

「と言う訳で、私の家に行くって話はまた今度ね。コトネ」

「え……うん！」

そうコトネが笑顔で応え、この問題は解決した　かに思えた。

「別に外見を見るだけなら、大丈夫なんじゃないか？　中に入る訳じゃないんだし」

「あら、瀬田くんは私の家が見たいの？」

せつかく丸く収まるうとしていた所で茶々を入れてきた未来に、遠坂は若干の苛立ちを覚え挑発気味に言う。

こうい言う方をすれば首を横に振るだろうと判断した故なのだが

「……まあ」

意に反し未来は肯定。

ちなみに未来側の意は、一度魔術師の家というのがどんなモノなのか見ていたいと興味を惹かれたからだ。

そこにいる遠坂の父親が聖杯戦争のマスター、つまりは自分の敵であるとはつゆ知らず。

知っていたら確実に避けていただろうというのに。

無知故の愚考。

無知は罪であるとはよく言ったモノだ。

「あのね……なんで？」

「なんとなく興味を持っただけ。……という訳で、行こうか」

「ちよつと、何勝手に決めるのよ！」

「どっちにしる、ここに留まっても意味ないし、それなら適当にでも進もうよ。確かあの辺って外国人が多いんでしょう？」

調べ学習としても、それなりにやりやすいのではないかと言うが、こじつけ感は否めない。

「え、外国の人？　いるの？」

期待するような目で遠坂を見るコトネ。

それを好機だと判断した未来が「それを調べてもいいんじゃないか？」と畳かねの追撃。

「……分かったわよ」

二人の視線に耐えられなくなった遠坂がようやく折れる。

この時、何とか誤魔化して外国人のいそうな場所でもうろついておけばなんとかなるか……などと安易な思考であったと後に遠坂は語る。

「なあ、遠坂」

「……なによ」

「ここはどこだ？」

それはなるべくしてなる事態だったのかもしれない。

交差点を超えて、街並みが洋風へと変わったのを確認したまでは良かった。

時部の家までの道のりなどだから遠坂に任せておけば大丈夫だろうと、甘く見ていたのがいけなかった。

最初の方は、家をスケッチしたり、住民の人達に話を聞いたりしていたのだが、段々と遠坂がその作業に参加しなくなり、どうしたのかと思った。

やがて同じ道を何度も行き来したり、考え込む素振りを見せたりしだし、その姿から未来は悟った。

こいつ迷いやがったな、と。

「私の家がある住宅街よ」

「だから、ここはその住宅街のどこなんだって聞いてるんだけどもっともな問いに、遠坂は応えない。

無視というより、返す言葉がないという風である。

気がつけば人気の無い、裏道のような場所。

コトネなんかは不安でさっきから無言。

身をすくめながら遠坂の後ろをついて歩く。

自分の家に行くのに何故迷うんだとも問おうと思ったが、体力と

気力を浪費するだけの無駄なやり取りだと踏んだので、止めておいた。

『この辺りは嫌な予感がします。なるべく早く撤退した方がいいかと』

『……僕も同感』

おそらくその嫌な予感は、キャスターだけでなく、ここにいる全員が抱いているモノであろう。

気丈に振る舞う遠坂も含めて。

未だ年齢が一桁な幼い子供三人が迷子、人気の無い不気味な道。泣き出さないだけマシだというものだ。

『この様子だと遠坂の家は拝めそうにないな』

『ええ、おそらく。……ですが、何故彼女の家に行こうなど思っただのですか？ 以前聞いた話では遠坂凜は魔術師だと記憶しているのですが』

『いや、魔術師の家ってのはどうなってるかなって、ふと思って。僕らは戦うつもりがないとはいえ、魔術師を相手にするわけだし、少しは魔術師について知っておかないとってね』

魔術師の存在は知っていても、どんな存在なのかまで未来は知らない。

唯一の情報源が未来視であり、それも断片的で、理解に至るには難しいものがある。

もういつそ、遠坂に直接聞く手もありかなとも思っていたりするが、それがきつかけで周囲に聖杯戦争のマスターだとバレでもしたら洒落にならないので、あくまで最終手段としている。

『……なるほど。ですが、彼女が魔術師といことは、彼女の家系もまた魔術師ということですよね』 『まあ……多分』

それがどうしたんだと未来。

そんな可能性は普通に思いつく、今更問うまでもないだろうと。

『しかも彼女は将来のマスター。ならば、その家系の誰かが今回のマスターである可能性は大いにあるのでは？』

「……あ」

うっかり、すっかり。

考えもしなかったと情けなく口を開けたまま、固まる。

「なにしてるの？ 置いていくわよ」

「いや……うん、なんでもない」

どこへ行けばいいかわからないというのに歩き回る遠坂は、突然立ち止まった未来を不審そうに見ると、言葉通り足も止めずに置いていこうとした。

さすがに一人残されては困るので、取り繕いきれないまま後を追う。

『もしかして、あのまま家に行つてたら鉢合わせつてもありえた……とか？』

『迂闊に近づくのは得策ではないでしょうね』

ならば早めに言つて欲しかったとも思つてしまつたが、それ以上に迷つた事は不幸中の幸いだったかもしれないのかと、胸をなでおろして息を吐く。

『今思えば、だからこそ彼女は自身の家に向かう事を拒んだのでは？ この今の状況も彼女があえて家へ向かう道を避けて知らない道を選んだからかのように思えます』

事実、遠坂が道に迷つたのはその通り。

そんな事は一言も口にしないが。

というより、魔術関係の事は離せないので、口にしたら変な空気になる事は必至だ。

何故わざわざ自ら迷うんだという話になる。

『僕が余計な事を言つてしまつたつて事が……』

つまりはそう言う事。

未来が遠坂の家を見てみたいなどと言い出さなければこんな事にはならなかった。

……もつと言えばコトネの発言が発端ではあるのだが、そこを糾弾するのは筋違いにも程がある。

「遠坂」

「……なに？」

「悪かった」

「……は？」

何の話だと、いきなり話を振られた遠坂は素でそう本当に短く返した。

当然の反応である。

『キャスターは帰る道とか分からない？』

『いえ……すみません。力になれず』

『いや、こつちこそ』

自業自得。

責められはしても、責める資格は全く無い。

『ここは前に案内してもらった時には通りませんでしたよね』

『うん、こんな場所知らない』

以前散策で深山町を歩いた時は、本当に大まかにとりあえず一周といった感じで、要所要所を回っただけ。

この洋風住宅街にもよったが、あまり奥の方には行かなかった。

もとよりこんな裏道の様な場所はある事すら気づいていなかったが。

「わあ……」

ふいに、コトネが感嘆の声を漏らす。

圧倒されるように、感心するように。

言葉にならないと訴えるように。

つられてその視線の先へと目を向ける。

すると、そこにあったのは洋館。

それもかなりの豪邸だと見て取れる程に、広く立派な。

入り口に構える門も威圧的だ。

そして、それ以上に 気分が悪かった。

その館を目にした瞬間、刹那、未来は針で突き刺したかの様な痛みが頭の中を走るのを感じ、視界が揺れるのを確認した。

同時に吐き気、言い得ぬ悪寒。

何か不快なモノが内に割って入ってきたような感覚。

「瀬田くん！ ちょっと、あなた大丈夫？」

「……大丈夫」

客観的立場から言うなら、どう見ても大丈夫ではない。

不調は素人目にも見て取れる。

青ざめた顔、おぼつかない足元。

それでも主観的立場からすると平気なフリをしているつもりなのだが、やはりそれはフリでしかなかった。

「……行こう。早く帰らないと、皆が心配する」

声のトーンは極めて低い。

調子以上に気分が優れない。

さっさとこの場を立ち去りたい。

目に映る館が不吉なモノに見えてならない。

ここは見た目通りの小綺麗な場所では決して無いと。

そう直感が、まだ目覚めぬ記憶が告げているのだ。

「わかったわ。そうしましょう。行こうコトネ」

遠坂はコトネの手を引き、未来に肩を貸し、来た道を引き返す。

「いや、僕は……」

一人でも大丈夫だ　と伝えようとしたが、それを遠坂の目で遮られる。

「こんな状態のあなたを歩かせるより、こっちの方が早いのだよ」

未来は遠坂に半分体重を任せながら歩みを進める。

重いだろくに遠坂は文句一つ言わず、未来の体調が戻るまでそれ続けた。

「よかった……」

そう本当に安心した様な、そして憔悴しきった声は誰にも聞こえず、虚しいまでに虚空に消える。

未来達が去った後、洋館を 間桐邸を遠くから使い魔によって覗いていた一人の男が冬木のどこか、昼なのにも関わらず薄暗い人の気配を感じさせない場所で死体の様に倒れていた。

満身創痍。

白髪、肌の至る所に浮き上がる癍痕、壊死して白濁した眼球。

肉体は崩壊しかけており、その命はこうしている間も刻々と削られている。

そんな状態であるにも関わらず、男は自分の事より、あの忌々しい己の家に近づいた遠坂凛を心配していた。

何故あの場所に訪れたのかは知れないが、間桐邸はマスター達の使い魔が見張っている。

卑劣な、勝利に貪欲な人物なら、人質としてさらうと言う事もあり得る身。

そんな遠坂凛が姿を監視の前に現すのは危険ではと危惧したのだ。
……使い魔を操る魔力さえ、本当は惜しいというのに。

07 必然と偶然による転機

聖杯戦争の幕が開け、事態は確実に進行していた。

未来は知るはずが無かったが、アサシンによる遠坂邸襲撃、倉庫街での集結死闘、ランサーのマスターの拠点であったホテルの爆破。この冬木を着々と異常が蝕む。

まだ、序盤だと言うのに、キャスターを除く全てのサーヴァントが姿を現し、その何人かは真名も割れている。

真名とは召喚された英霊の真の名前、いわば正体。

基本的にこれは秘匿されるもので、相手に正体が知れるということとは、英霊の残した伝説や伝承が知られるということ。

つまりは弱点につながる情報をさらす事にもなってしまうのである。

だからこそ真名が明らかになるのはデメリットなのだ。

……もともと、登場早々自ら名乗ったモノもいるが、それは例外。よっぽど自信があるか、よっぽどの馬鹿かのどちらかである。

『そうか。ついにキャスターも捕捉したか』

「はい。現在アサシンに追跡させている所です」

そこは冬木郊外にある教会の地下室。

未来もかつて一度だけ、教会には訪れた事があるのだが、そこが魔術と関わりがある場所であり、聖杯戦争の監督役を務めているとは思いつかなかった事だ。

『ふむ……しかし、何故非力なキャスターが工房に籠らず、わざわざ間桐邸などに現れたのか』

遠坂邸同様、聖杯戦争の拠点と知られている間桐邸に使い魔をよこすのは安直なまでの、初歩の戦略。

そして、その使い間に紛れて、アサシンのサーヴァントも気配遮断のスキルを用いて見張っていた。

すると、そこに霊体でこそあったが未知のサーヴァント、つまり

まだ姿を見せていなかったキャスターが現れたのである。

今まで尻尾を出さなかった割には、なんとも間抜けな始末だ。

キャスターの情報はすぐに、アサシンを通じてそのマスターである言峰綺礼に伝わり、さらに魔導通信機で遠坂邸にも渡った。

「それなのですが……キャスターは、現在三人の子供と共に行動をしています」

「……子供？」

「はい、そしてその一人が　導師のご息女でした」

「ッ……凜が？」

思わぬ事態に冷静を保とうとしつつも動揺は隠せない。

言峰綺麗の通信相手、遠坂家の当主時臣は、どういった経緯で自分の娘が間桐邸まで赴いたのかも気になったが、それ以上に敵サーヴァントが共に行動している事が理解できなかった。

「幸い危害を加える様子はなく、少し距離を置いて見張っているだけなのですが。ただ、どのものかは知れませんが使い魔の気配も一つあります」

「……警戒は十全としておいてくれ。杞憂であればいいのだが、もしもと言う事がありえるかもしれない」

穴熊を決め込み工房から姿を現さないマスターに、戦闘値も未知数で得体の知れないサーヴァント。

そんなアーチャー陣を打ち崩さんと、キャスターがその娘を狙っているのではと危惧に至るのは当然と言えば当然であった。

そして、その手が成功すれば、時臣に対して有利になれのもまた、事実であろう。

いかに魔術師といえど、人の親。娘が危険に晒されて、損得勘定で切り捨てるなど出来はしない。

だからこそ、隣町に避難させているのだから。

「承知いたしました」

「それで、マスターについてはまだ不明のままか？」

「はい。それらしき人物は見当たりません」

そう、アサシンが捉えているのは、あくまでキャスターと、そのキャスターに付けられている三人の子供。

そして、キャスターの狙いが遠坂凜だと踏んでいれば、その三人の子供の中にまさかマスターがいるのではという思考が生まれなかったのも無理ないのであろう。

「すみませんでした」

学校に何とか帰還できた未来は、心配をかけてしまった先生方に頭を下げる。

続いて遠坂とコトネも。

各地に配置されていた大人の目を運悪くかいくぐって迷子になってしまった未来達は、集合時間になっても帰ってこないことから捜索隊を組み、ひいては警察にも連絡しようとしていた。

おそらく、これを教訓とし次からは児童を保護者無しで自由に行動させすぎるのはよくないだろうと、この調べ学習が見直される事となる。

「まったく、今日の今日であんたは……」

三人の事は、各々の親へと伝わっており、こうして未来の母親も迎えに来ていた。

朝に、大丈夫だと言って家をでたそうそうにこの騒ぎ。

信用の欠片もできもしない、ただただ呆れるばかりである。

「次からは、本当に大丈夫……だと思う」

「すみませ、うちの凜が連れ回してしまったみたいで……」

「いえいえ、こちらこそ」

それから注意をいくつか受けた後、それぞれ親に連れられ家へと向かった。

既に授業時間は終わっているため、他のクラスメート達は帰宅している。

そんな中

『監視はどうなった？』

『……どうやら消えた様です』

現在、キャスターはマスターである未来から距離を取っており、未来からは見えない。

学校へと向かう途中に、キャスターが使い魔らしき気配に気づき、その居場所を突き止めるのと同時に

、万が一向こうがキャスターの存在に気づいているのならば、せめてマスターの正体だけは隠して見せようと、一定の距離を取って無関係を装った。

これなら最悪、子供を狙うだけの卑劣なサーヴァントとしか思われないだろうと。

『と言う事は結局、キャスターはバレて無かったのか？』

『分かりません。ですが一応このまま警戒体制をとる事にしましょう。私が気づいていない使い魔もいるかもしれませんから』

『……分かった。頼む』

もちろん、それは念の為に過ぎず、アサシンがいる事なぞ気づいてはしない。

『あ、そうそう。これから夕ご飯の買い物によるつもりだけど、ついて来る？』

『……止めとく。今日は疲れたから帰るよ』

『そう。じゃあ、これ鍵ね。また迷うんじゃないよ』

『分かってるって……』

今日の迷子をまだ持ち出してくる母親に、勘弁してくれとだれた返事。

心配をかけた己の愚行には重々承知しているのだから、そっとして置いてほしいものである。

鍵を受け取り、一人自宅へと足を向けた。

そう、今は本当に一人。

召還以降側にいて当たり前だったキャスターは見あたらぬ。

『これからはより慎重になるべきかもしれませんね』

『……慎重に？』

『ええ。今まではいざという時に備えて常に側にいるような心がけていましたが、私が側にいる事が、いざという事態を招きかねないのではと。言っては何ですが、マトモな思考なら、よもや幼い子供がマスターだとは、確固たる証拠でもない限り想像がつかないでしょうから』

『まあ、確かに』

キャスターの言う事はもっともであり、実際に言峰達も気づかなかった。

『セイバーの時も間一髪でしたし……本当に迂闊でした』

『いやいや、それをいうなら僕の方が』

よつぽど迂闊で間抜けで愚かだ。

『いえ、やはり私の責任です。私はあなたを守り通すと誓ったのですから』

『キャスター……』

客観的に見れば、どちらに非があるかどうかは一概に言えない。

未来はマスターとしては三流以下の場違いレベル。

甘く、どこか楽観的……いや、生きるにおいての一挙一動に気を使う事を放棄している。

未来の問題点は幼さではなく、未来視による弊害にあった。

小さい頃は未来視が生じる頻度が今より少なかった代わりに、必ずといっていいほど自分に関わる未来だった。

それも同じ場面を何度も観る事も多々あった。

それ故に、感動的な場面で感動できず、感受性豊かな時期に未来は、人生を退屈だと感じるようになった。

まるで一度観た映画を無理やり見せられているような感覚。

しかも未来視は、主観的ではなく、神の視点とでも言うかのように

な客観視。

その感覚はいつそう増す。

この力を何かに使えないかと息巻いた事もあったが、未来が変わった事はただの一度も無かった。

ただ未来は予め決まっただけで、変えようがないんだと悟っただけである。

子犬が飢えて死んだ事も、近所のお兄さんが車に跳ねられ大怪我を負った事も、学校の先輩がいじめの末に心を止んだ事も、どこの誰かも知らぬおじさんが借金に終わられて自殺した事も。

全て知っていながら、何も出来なかった。

未来視がもたらしたのは希望ではなく絶望。

自分の死を観た時は、とうとう生きる事を諦めた。

そんな育ち方をしてしまったからこそ、未来は危機感というモノに非常に疎い。

成長するにつれて、未来視がもたらす光景が自分とは関わりが無いものが増え、自分の未来が減っても、それは変わらなかった。

そう未来の価値観は歪んでしまっているのだから。

むしろ自分に関係のない未来を觀せられる事で、主観というものを失いつつある気さえしていた。

そんな未来だからこそ、警戒する事になれていなかった。

『マスターに近づく敵サーヴァントの気配を感知出来るだけの距離は保ちます。念話も出来る程度には。ですが、刹那を惜しむ時があれば、令呪をお使いください』

『うん、分かった』

こうしてキャスターとそのマスターは別行動をとる事にした。

このアサシンが追跡していたタイミングで、その判断に至ったのは、キャスター達にとって得体の知れなかった使い魔のおかげである。

使い魔の主には感謝の念が尽きない事この上ない。

08 世界を塗りつぶすのは絶望

自宅に何事も無く辿り着いた未来は、自室に向かいベッドに寝そべった。

ただマスターだとバレたく無いだけなら、こうして部屋に籠っていればいい。

キヤスターが近くにいなければ、未来のわずかな魔力を辿るや感知するなどしない限り分かりはしないだろう。

だが、それでは無意味。

この家ごと炎で燃えつきでもしたら、未来視で観た光景はいとも容易く再現されてしまう。

祈っただけで未来が変わるなどとは、今更夢でも思いは出来なかった。

「そう言えば、あれは何だったんだろうな……」

昼間館の前で起きた身体の不調。

あの感覚……そう言えば、以前にも似たような事があったなど、思い出すみたいに感じた。

一度じゃない。

突然気分が悪くなった事は今までにもあった。

いつだっただろうか。

あれはそう 初めて自分の死を観た時、後は新都の教会に行つたときだろうか。

何かが身体に侵入してきたかの不快さ。

見てはいけないモノを観てしまったような感覚。

それを必死に忘れようと抗うような頭痛。

ああ、もういつそ本当に忘れたかった……そう未来は思った。

知らなければ良かったと。

夢を見る。

いや、違う。

これは未来視だ。

視界が全て今では無く、未来を映す。

夢というのは無意識のうちの記憶の整理故だと聞いた事がある。

だからこそ、未来視をしやすいのだろう。

抗う理性が働きにくいから。

一時期は毎日夢が未来視に蝕まれた事もあった。

しかし、それは耐性がつくまで。

だから、こうして二日続けて夢で観るのは久しぶりだった。

原理故に夢の方が情報量が多い。

最近比率が増えていた白昼夢様な未来視では、僅かな時間しか観えない。音も聞こえない。

今回の様に、余計で不快な事を知らなくて済む。

そこは光なんて射す事の無い闇の中。

暗い、そして観ているだけで冷たさを感じる。

人の温もりも、希望もそこには無い。

無数のおぞましい、理解したくも無い蟲が蠢いており、その中に紛れるように、一部であるかのようにそこに存在した少女の輪郭。

少女の目は虚ろで、未来以上に希望を捨て絶望に身を墮としていく。

希望など抱くだけ愚かで、人形のように心を殺した方がいつそ楽だと。

そんな少女の前には、惨めに転がる一人の男の亡骸。

闇の中の蟲達に群がられ、遺体は徐々に小さくなって消えていく。それを少女は、目に焼き付けるように最後まで見届けた。

より、暗い闇をその目に宿して。

耳を塞ぎたくても塞げない。

目を逸らしたくても逸らせない。

その確実に起こるだろう、誰とも知らない未来を強制的に観せられる。

蟲達が男を喰らう音が脳裏に残る、あの絶望的な少女を忘れられない。

未来視とは、なんとも苦痛な呪いだろう。

どうせ何も出来ないし理解していながら、知らなくてもいい事を記憶に刻んでくる。

「くそ……」

目を覚ました未来は、開いた目で辺りを見る。

いつもの自分の部屋。

そこには蟲はいない。

少女も男もない。

けれど　この世のどこかにはいるのだ。

そして、その観た通りの未来を辿る。

「桜……」

そう死の間際に男が呟いていたのを思い出す。

あの少女の名前は何だっただろうか……などと意味の無い事を考える。

どうせ会うことも無い、会った所で何も出来ない存在。

記憶から抹消できなくても、忘れたフリ、知らないフリをしていればいいのだ。

そうすればあの光景を、惨状を思い出さなくて済む。

この世は本当に絶望で満ちている。

希望なんてどこにも無い。

改めて未来はそう思わざるを得なかった。

やはり自分は炎に焼かれながら死んでいくのだろうか、こうして足掻いている事すら定められた運命の一部なのだろうか……と。

「マスター、聞こえますか？」

「……うん」

「良かった、さっきから中々念話が繋がらなかったの何かあった

のかと』

『いや、ちよつと寝ていただけ。何かあったの？』

目を覚ませたのはキャスターが念話で話しかけていたからだったのだらうかと思しながら、未来は話を進行させようと次の言葉を急かす。

気分は優れないが、嫌な事を思考から追い出す為にも、違つ事を考えるのは有効だった。

『サーヴァントを発見しました。こちらには気づいていませんでしたが、どこかに向かうようです』

『……そうか』

『ええ、とりあえず報告しておこうかと。私はセイバー以外を見たことがないので、どのクラスかまでは分かりませんでした』

そこで会話は費えた。

もとよりただの報告。

これ以上話すことは無い。

『……なあ、頼みがある』

『構いませんが、何でしょうか？』

『そのサーヴァントの後を追ってください』

『サーヴァントをですか？ ですが、それではマスターの下を離れる事に』

『監視者がいた場合、一箇所に止まりすぎたら、見つかるかもしれないだろ。だったら大きく動いて錯乱させるのも手だと思っ』

事実キャスターは一定の距離を保ちつつも、未来の家のある地区から離れる事は無かった。

物陰に隠れながら、転々と場所を移すのみ。

この辺りにマスターがいるのではと感づかせてしまうのも時間の問題であった

『それに、何か情報を掴めるかも知れないし。こっちは戦う手段が無いんだ。最低限の情報は必要じゃないか？』

未来が求めたのは動き。

未来視で観た光景を忘れ、このまま隠れ潜むだけでは何も変えられないのではという不安を打ち消す為の動き。

何もしない事に焦りを抱き、何も起きない静寂が絶えがたかった。……分かりました。ですが、すでに距離があり、見失う可能性もあります』

『それでもいい。あと、危機に陥ったら言ってくれ、すぐに令呪で呼び戻す。僕は君がいなかったら、何も出来ないから……』

『ええ。必ず無事に生還してみせます』

『ああ、絶対に』

キヤスター一人を危険に晒し、自らは安穩としている。

自身の無力さは呆れるほどに、嘆く事すら諦めるほどに理解していた。

だからこそ、キヤスターに頼らざるを得ない。

キヤスターがいなくなる事は、奇跡の可能性の消滅と等しい。

そこは冬木市市街から離れた森。

鬱蒼と生い茂る木々が占める、未開の地。

奥深くには御伽の城があると囁かれていたりする。

いわゆる怪談。

そんな場所に、件のサーヴァント、ランサーはマスターと共に向かっていった。

キヤスターから特徴を聞く限りは間違いない。

『ここか……』

『ええ、どうやら奥に』

言いかけてキヤスターの言葉が途切れる。

『どうした？』

『魔力の反応が、ここはただの森ではないようです。この土地そのもののモノもあります。これは誰かの造った結界ではないかと』

『ランサー達はその誰かの下へと向かったというわけか』

『おそらく。マスター、どうしますか。私がこの森にいる事はあちらも気づいたでしょうし、何よりも幾重にも罠がしかけてあります』

『……仕方ない。無理なら引き上げよう』

深追いして脱落なんてなったら笑えない。

キヤスターは戦えないのだから。

『いえ、この森の奥にある城まで辿り着く事は可能です』

『いや、でも、ランサーもしくは他のサーヴァントに見つかったらどうするんだ。無理はしない方がいい』

『……大丈夫です。私のスキルはご存知でしょう？ それが今有効に働いています。無事行つて帰つて来れます』

キヤスター言つたのスキル……それは『啓示』。

目標の達成に関する事象全てを予測する、予知に似た力。

キヤスターの勘が鋭いのもこれのおかげだ。

『このような機会、次にいつ来るか分からないでしょう。私もサーヴァントの力というものを知っておきたい』

その言葉に、未来は一瞬驚いた。

ついさつき提案した時は、反対さえしようとしていた意見を翻したからというものもあるが、それ以上に、キヤスターが自らの我を通してとしたのが、これが初めてだったりするからだ。

助言こそすれど、マスターである未来に反論と呼べるような意見を述べた事は無い。

自分の意思で行動する事を避けている様な節さえ見られた。

どこか臆病で、その気丈な顔立ちはそれを心を隠す為の仮面なのではと思えてくる。

『……分かった。もう一度言つ、帰つて来いよ』

『ええ、必ず』

このキヤスターの申し出は、昼間の様子、そして念話時の未来の声から感じた不安というものを少しでも拭えたらという思いから来た行動。

キャスターは悟っているのだ。

マスターは未来を変えられると心から信じていない、希望に身をうずめる事を恐れいている……と。

ここまで来たのだ、少しでも今後の行動に生かす為、何よりこの世に希望はあるのだと未来に教える為にも、自らの身を省みている場合ではない。

そう判断したのだ。

祈る事を諦めたマスターと、祈りを止めなかったサーヴァント。

その二人は対極にいるようで、同じ場所にいた。

ただ背を向け合っているだけ。

片や絶望に顔を向け、方や希望に顔を向ける。

『祈りは必ず届きますから』

そう言っつて、キャスターは森の奥へと足を踏み入れた。

09 銀と水銀の錬金術

その城は、セイバーのマスターの拠点の一つであった。

聖杯戦争における始まりの御三家の一角であるアインツベルンの城。

そんな所に自ら攻め込む、ランサーのマスターはある種焦りの様なモノを抱いていたのであろう。

倉庫街での失態、拠点の喪失。

持ち込んだ魔道器の数々も失われた。

現在は郊外の廃工場を仮の隠れ家とし、そこに協力者でもある許嫁を匿っていたのだが、環境としては最悪、許嫁の機嫌も悪く、プライドが許さなく、耐え難いもの。

こんな状態で手を拱いては自分の立場はより厳しくなると危惧し、敵サーヴァントとマスターを討ち取る事で汚名挽回を試みた。拠点が知れているのは、遠坂、間桐、そしてここアインツベルン。遠坂のアーチャーの戦力は未知数であり、うかつに攻め込むのは危険。

間桐は、消去法から考えてバーサーカーかキャスターだが、バーサーカーはアーチャー以上に得体が知れず、キャスターに至っては姿すら現していない。

ならば、残るのはセイバー。

幸い、セイバーは手負い。

左腕が使えない状況にある。

いかに最優のサーヴァントといえども、勝算はある。

そして、何よりも 昨夜のホテル爆破の一件。

魔術としてあるまじきセイバーのマスターに嘆きと怒りを覚えていた。

そういった経緯もあり、ランサーのマスターはアインツベルンの拠点に乗り込むに至った。

大胆な挑戦にもみえるが、そのマスターは自信で溢れており、どんな防備で待ち構えていようと撃ち破って見せようという心持だった。

蛮勇を持って侮蔑を撤回させる、と。

そして、それを予期していたセイバーのマスターが城で待ちかまえていた。

とは言っても、待っているのは罠でしかないが。

当のマスターは城から少し離れた場所で待機。

元より彼はここには、協力者の女性、アイリスフィールと落ち合う為だけに立ち寄り、ついでに馬鹿正直に城まで責めて来たモノに対するトラップを仕掛けて去るつもりだった。

だが、そんな時にランサーが森に侵入して来た事で予定を変えた。切嗣というセイバーのマスターは、己のサーヴァントを城内に待機させ、責めてきたサーヴァントの相手をしるだけ指示した。

アイリスフィールはセイバーのすぐ側に構えている。

そして

「Scalp!」

その一喝と同時に、城の分厚い大扉が**かんぬき**もろとも容易く両断され、主で無い乱入者を内部へ迎え入れた。

常人ではありえない芸当。

これが魔術というモノである。

荒々しい入城に対して、悠然とホールに踏み込む魔術師。

敵地への襲撃というのに怯えも不安もありはしない。

「アーチボルト家九代目頭首、ケイネス・エルメロイがここに**つか**まっ仕る!」

堂々と、余裕を持って名乗りを上げる。

「アインツベルンの魔術師よ! 求める聖杯に命と誇りを賭して、いざ尋常に立ち会おうがいい!」

その挑発的な響きに対するアインツベルンの対応は「随分と荒っぽい入城ね」

落ち着き、透き通った女性の声。

予想に反しての、正々堂々の応答だった。

あれほどの外道な策を講じた割には、随分すんなりと決闘に応じたものだと、訝しみはしたが、アインツベルンは仮にも威名をもって知られる魔術の名門、下策に手を染めても魔術師としての誇りはまだ持っていたかと、小さく頬を動かすだけ。

「ようこそ……といった雰囲気では無さそうだけど、一応こちらも名乗りを上げた方がいいのかしら？ アイリスフィール・フォン・アインツベルン、セイバーのマスターです」

シャンドリアの明るさに照らされた階段の最上段に、アイリスフィールはいた。

そして、セイバーも。

「こつも早く再戦が叶うとはな。貴様とは決着を付けたいと思っていたからな」

マスターと共に、双槍を携えたランサーは城へと乗り込んでいた。彼は騎士。

主を守り、誇りを持って敵を撃つ。

「私もだ、ランサー」

鎧を纏い、見えない剣をセイバーは構える。

今城内にいるのは、魔術師とサーヴァントが一組ずつ。

ランサー側は、アイリスフィールをマスターと認識している為、構図とすればマスターとサーヴァント、それぞれが対峙していると思わせる展開。

まさか、セイバーのマスターはそこにはいないとは思ってもいないのだろう。

せいぜい、ホテルを爆破した下賤な輩がいるだろうという程度。

「ランサー、貴様はセイバーの相手をしろ。その間に私はセイバーのマスターをやる」

「主、そのような事をせずとも、私がセイバーを討ち果たします」

「ふん、これはあくまで私の決闘だ。貴様は私の指示通り動いてい

ればいい。なに、私が敵を撃つ前に、倒せばいいだけである。」

ランサーのマスターケイネスにとって、ここには正しく名誉挽回に訪れたのだ。

わざわざ出向いて、何もせず変えたのでは恥じもい所だ。

それに、サーヴァントさえ邪魔しなければ負ける気はしていなかったのだ。

「……承知しました」

主の命とあり、ランサーは承諾した。

仮とはいえ、一騎打ちは許されているのだ、倉庫街でバーサーカーに加担しろという命令より遙かにマシである。

ただ、信用されていなかったというだけで・

槍を構え、顔を引き締める。

「フィオナ騎士団が一番槍、デイルムツド・オディナ 推して参る」

「ブリテン王アルトリア・ペンドラゴンが受けて立つ」

こうして二対のサーヴァントの死闘は再び幕を開けた。

「Shape、形態よistLeben!生命を 宿せ」

二小節の詠唱で、魔術を一気に紡ぎ上げる。

アイリスフィールドが継承する伝来の魔術とは、物質の錬成と創製。取り出した銀の針金の束の一本一本が複雑に動き、一つの形を模る。

それは巨大な銀の鷹。

それもただの人形ではなく、アイリスフィールドの意思で動く命を託す武器。

弾丸をも超える速度で鷹は飛翔し、ケイネス目掛けて更に加速し急降下。

それを

「ほお、さすがはアインツベルンというところか」

ケイネスは感心するかのように、あくまで高みから見下ろすように感想を述べた。

鷹の一撃はその身には届かず、水銀の盾によって阻まれた。

二人の魔術の勝負は、つまるところ銀と水銀、異なる錬金術の競い合いだった。

「くっ」

アイリスフィールは体制を整える為に、先に造り出した銀の虎に掴まり距離を取る。

二つを同時に繰るのは容易い事ではなかったが、それでも苦しむ顔も見せずにやってのける。

ケイネスの扱う水銀は絶対防御とでもいつかのように、攻撃の一切を防いでいく。

アイリスフィールの魔術だけではない。

城の各地に仕込まれた罠すらも。

「堕ちたものだな、アインツベルン」

ケイネスは心底侮蔑するように、哀れむようにぼやく。

魔術の家系として歴史を持ちながら、仕掛けられていた罠は全て魔術的な攻撃ではなく、ただの炸薬を用いた通常兵器。

魔術としては、誇りも名誉も全て捨て去るに等しい行為である。

「随分と、余裕な事ね！」

鷹がその足に、花瓶を掴みながらケイネスに向かう。

それは仕掛けられていた罠の一つ

衝突と同時に爆発し、内部の鉄球が扇状の範囲に発射。

まともに喰らえば五体満足であるはずがない。

そもそも個人に向けて使うモノでは決してない。

それでも その魔術師は無傷だった。

銀の鷹は朽ちてしまったというのに。

また、新たな武器を作り出そうと時間を稼ぐかのように、アイリスフィールは虎により城外へと脱するべく門へと向かう。

当然、敵がそれをさせるはずがなく、魔術による移動で先回りをして出口を塞いだ。

そこに 第三者が待ち構えていたとも知らず。

10 馬鹿で甘い判断

それは見惚れる程だったという。

卓越した剣と槍。

打ち合い、探り合い、ぶつかり合う。

死闘であり一騎打ちの決闘。

互いの命と誇りを、それぞれの武器に乗せて舞う。

それを城から少し離れた森に潜むキャスターは眺め、圧倒されていた。

セイバー、ランサー、共にこの傍観するサーヴァントの気配を感じ取っていたが、一向に距離を縮めて来ない事から、勝負に支障無しと、邪魔でもしない限り放っておく所存となった。

二人の英霊は、あくまで今ある戦いに全てを注ぐのである。

もう一人、森への侵入者がいる事に気づいているアイリスフィールも、ケイネスと戦闘中。

分は敵にあり、命懸け。

気を余所に払う余地は無く、多体の最中に現れた侵入者を他に知らせる事は出来ない。

…… 例え致命傷を瞬時に回復する術があろうともだ。

ちなみに、アイリスフィールとケイネスが戦いを始めたのは、サーヴァント達の少し後。

互いに言葉で牽制し、ケイネスが魔術を使って来る事を促した事で火蓋を切った。

銀の虎を錬成し、逃げ切る手段を確保しつつ、銀の鷹と罫で攻撃。それをケイネスが礼装を用いて水銀で防御。

自らが優位だと悟っているからなのか、無力感を思い知らせてやるうという意図なのか、攻撃という攻撃をケイネスはまだ行っていない。

…… 端から客観的に見ているキャスターからすれば、アイリスフ

イールの方が有利に見えていたりするのだが。

それは彼女達云々ではなく、サーヴァントの問題。

最初こそ拮抗していた二人だったが、徐々に剣が勝りだしたのである。

攻める剣が増え、槍は交わす為振るわれる。

二人はすでに一度戦っており、戦い方は知れている。

ランサーに至っては奥の手である宝具すら。

この差はようするに二人の根本的力の差である。

備える武力、そしてサーヴァントとしての能力値。

それを踏まえたなら、セイバーが片手を使えなくとも、ランサー

が打ち勝つのは容易いどころか、困難だと言える。

以前の二撃は、宝具の正体を知らなかったから故でしかなかった。

言ってしまうえば、あの時が一隅の好機だった。

仕切り直され、改めて尋常に挑めばこうなる。

それでも　ランサーは怯みはしない。

強敵と、しかも自分同様誇りを持った騎士とこうして合間見えて

いる事に歓喜すらしていた。

負けるつもりはなく、必ず騎士の誇りにかけて主の命に従いセイ

バーを倒す。

そう、その瞬間まで思っていたのだろう。

見えない剣、それをセイバーが振りかぶる。

防御を崩し、一撃をと。

ランサーは繰り返す様に槍でかわそうとしたの。

しただが　それは半ばで潰える事になった。

意識を、気を目の前の騎士から反らしてしまったのだ。

自らの主が致命傷を負った事で。

城の出入り口である大扉に移動したケイネスを待っていたのは、

真のセイバーのマスター。

その森に紛れてライフルを構える存在に、ケイネスは気づかない。

そして、アイリスフィールが銀の虎を放つと同時に、先程までと

同様に魔術を行使し、水銀の防壁を作り出した。

それが失策。

致命傷だった。

魔術回路を活性化させていたその身を弾丸が貫く。

サーヴァントとマスターは繋がっている。

危機とあらば察知でき、彼は主を守る騎士だった。

すぐ側にいながらの不覚。

どれだけ悔やんでも、自分を責めても足りはしない。

「主！」

その時点ではまだケイネスはまだなんとか生きていた。

神経が誤動作でも起こしたかの様に全身の筋肉を痙攣させ突っ伏す主に、同じく致命傷を負ったランサーが駆けつける。

セイバーの一撃を防げず、ともに喰らい、その胸からは血が流れ落ちるだけ。

それでもランサーは主を守る為に、間に合えと、決闘を放り出し主の下へ向かった。

満身創痍の主従の前に、非常にトドメをささんと新たな弾丸がケイネスを狙うが、その次弾は放たれる事は無く、止める者のいないランサーがケイネスを抱えて城を去った。

「マスター！」

敵がいなくなると、セイバーはどこかにいるであろう切嗣に向けて叫んだ。

当然返事は無い。

そもそも呼び出して何を問い詰めようという。

例え切嗣がそうなるように仕向けたとはいえ、あのままではアイリスフィールの身が危なかった。

アイリスフィールの役目は、ケイネスに魔術を使わせる。

ただそれだけ

あとは、出来る事なら出入り付近までおびき寄せてくれと。

切嗣は、いざとなればいつでも撃てる準備を整えていた。

もつとも、セイバーは作戦は一切聞かされておらず、ただアイリスフィールの大丈夫という言葉を信じただけ。

その結果がコレ。

事実大丈夫だったが、ランサーとの一騎打ちは見事に水を差され、不意打ちの様な真似で斬りつけるといふ始末に至った。

それがどうにも納得がいかかったようだった。

だが、切嗣の用意した舞台で踊らされていた事に気づかなかった時点で、言葉を発する権利など無かったのかもしれない。

「……大丈夫ですか、マスター」

「ああ」

今まさに死闘どころか殺略が行われていた城からは、遠く離れた未来の自室。

そこでじっとしていただだけの未来の身をキャスターは案じる。

理由は単純。

霊体化を解いた事で、無理な魔力の供給をしてしまったのではと疑ったからである。

あのランサーのマスターにトドメを刺そうとしていた切嗣を止めたのは、他でもない未来だった。

あの場、森に潜んでいたキャスターは切嗣を発見し、最初に撃つ瞬間も目撃していた。

キャスターから状況を逐一聞いていた未来は、何故だかケイネスが殺される所を見逃せなかった。

会った事も無い、縁もゆかりも無い人間。

それを助ける意味など無い。

むしろ、自分を殺そうとするかもしれない敵、助けるなんて馬鹿をみるようなものだ。

だけど 見逃せなかった。

先程見た少女の残像がまだ脳裏から離れない。
今まで、不幸を知っていながら何も出来なかった記憶がかき回される。

そうだった経緯があつてか、殺される事を知っていながら見逃すのは気が許さなく、気がつけばキャスターに切嗣の気を引き付ける様指示していた。

その為には霊体化で叶わず、一瞬だけ実体化し切嗣の側で物音を立て、そのまま消え去った。

幸い、何故か追つては来なかった。

『でも、冷静に考えたら馬鹿な事をしたかもな……』

あの時点で、ランサーもマスターも瀕死。

放つておいても無事とは思えない状態だった。

なら、わざわざ危険を冒してまでも助けようとしたのは、ただの事故満足に過ぎず、仮に生き延びていたらいたで、自分を狙う敵が増えるだけである。

もしかしたら、あの未来を殺す大火災を起こすのは、そのランサー達かも知れず、もしそうだったなら一周回って笑えるかもしれない。多分笑えないだろうけど。

『いえ、マスターはその優しい心を失わないでください。そうすれば、救いはもたらされますから』

『キャスター……』

宛ても無く二人は未来に向かって必死に足掻く。

こうして未来は徐々に、刻々とずれてくのだった。

二人の知らぬ間に。

11 変えられるとは思えない未来

「なあ、遠坂……」

「なに？」

「もし、目の前に『助けて欲しくありません』って看板を抱えながら泣いてる子を見たらどうする？」

「……偶に妙な事を言うわよね、あんた」
「ふと思っただけ」

「またいつも通り通学し、いつも通り授業を受けた。」

今日は午前中のみなので、給食は無く、みんなもう鞆を持って変える準備を進めている。

そんな時に、なんとなく思った戯言。

「少なくとも見逃せはしないわね。常に優雅たれ……それがうちの家訓なの」

「助けるな、そう訴えてるのに？」

「本当に放って欲しいなら、わざわざ『助けて欲しくありません』だなんて表に出さなものでないかしら」

「……それもそうか」

それで戯言は終了。

一体何だったんだと言わんばかりに内容が無く、意味の無い会話
ちなみに、看板を抱えた子というのは、未来視で観た少女がモデル
だったりする。

絶望に身を墮とし、希望なんて忘れた様な目をした少女。

助けを求めることすら諦めた少女。

その目は明らかに異常で、おそらく遠坂にとっては看板少女と同じ
意と捉えるだろう。

あの子を僕は救えない。

まず、どこの誰かも知らないというのもあるが、未来視で観た以
上避けられないのだ。

あの未来は。

自分自身すら救えない奴が、他人を救えるはずが無い。

「瀬田くんは、そんな子に心当たりがあるわけ？」

「……なんで？」

「何か思いつめてそうな目をしてたから。助けを求めてそんな……
ね」

遠坂の言葉に未来は目を見開き驚いた。

よく、そんな事が分かるなど。

自分はそんなにも助けを求めていそうな顔をしていたのかと。

そんな顔をして、いままでも平然と歩いてきたんだろうかと。

希望なんて抱いていないはずなのに、それでも助けを求めている
んだろうかと。

「心当たりはあるけど名前と見た目ぐらいしか分からない」

「それでも、十分よ」

「……何をするつもりなんだ？」

何かを決心した顔つきをする遠坂に呆れるように、感心するよう
にぼやく。

返事は予想がつく。

「その子を捜しに行くのよ」

「はは……」

「今もしかして笑った？」

「いや、別に」

僕には出来ない事を、よくこつとも簡単に決断できるな……と未来
は思う。

もし、未来ではなく、この目の前にいる前向きな少女が、未来視
を持っていたならどうしたのだろう。

未来同様絶望するか、それでも真っ直ぐ前を向いて突き進むのか。

……考えても意味が無いことだけだ。

「で、その子の名前は？ 名前知ってるんですよ」

「……桜。僕らと同じ年か、年下ぐらいだと思っ」

未来視で観た男がそう呼んでいた。
ただそれだけを文字通り残った力を振り絞って。
そして、その名前を口にすると同時に遠坂の動きは止まった。
まるで、その名前に心当たりでもあるかのように。

「どこで見たの、その子」

「いや、どこでって言われても……」

学校が終わると同時に未来は遠坂の手によって外へと連れ出された。

問答無用で。

未来の意思に関係なく。

例の少女の名前を聞いたときは、少しばかり心を乱していた風だったが、今は元通り落ち着いている。

が、それでも視線が痛く感じる。

どこで見たと聞かれても、夢の中でと答える訳にはいかない。

よって、言いよどむしかないのだ。

仕方ない。

だが、視線が痛い。

「じゃあ、どんな感じだった。その子」

「……全てを諦めたような目をしてた。あれは『助けて欲しくありません』というより、『私は諦めました』の方が正しいかな」

「そう……」

「なあ、もしかして心当たりあるのか？ その桜って子に」

「え、いや……ちょっとね」

その様子はあからさまだった。

少なくとも優雅ではなかった。

「もし写真とかあったら確認できると思うけど？」

この状況においても、未来は他人事だ。

助けられるはずが無い、なら深く関わってどうすんだ。

そう思わずにはいられない。

だが 同時に、本当に何もしなくてもいいのかと、不安が襲ってくるのも事実だった。

知っておきながら、何もしない。

何も出来ない以前に、何もしない。

諦めている。

それで、そんなんでいいのかと。

後悔しないのかと。

だからこそ、遠坂に余計な戯言を言った。

だからこそ、こういう風にやれる事はやっている体を保とうとしている。

自己満足、自己欺瞞。

「……明日探して持ってくるわ」

そう遠坂が言うと、今日は解散となった。

別れると同時に未来は、一旦少女を忘れようと他の事を考えようと試みる。

少女の事を考えていると、あの異様で気持ち悪い光景まで思い出し、生理的に吐き気がしてくる。

『なあ、キャスター。近くにサーヴァントはいないか？』、

『ええ、気配はありません。ですが、サーヴァントの持つスキルには気配遮断というモノもありますし、直接ではなく使い魔等間接的手段で感知されるかもしれませんで、用心には越した事はないでしょう』

『……なるほど』

キャスターとの会話もそれで終了。

日常会話なんてモノもキャスターとの間には生じないので、業務連絡や今後の相談でも無い限り話なんて続かない。

『実は、また観たんだ。教室でぼんやりしてたらだから無理やり話題を作る。』

世間一般的には非日常的な話。

未来的にとつてはありふれてしまった日常的な話。

『……確か今朝も、昨夜も観たと』

『ああ』

今回観たのは白昼夢型の未来視。

ぼんやりと夢現に幻の様に未来を観た。

いつかのご飯が唐揚げだって事ぐらいしか分からなかったけど。

せめていつなのかぐらい分かれば便利なのに……と思った事もあ
るが、このあやふやさか幾ばくかの救いだったりもする。

想像の余地がある。

考える事を放棄せずに済む。

『今朝観た方は……相変わらずさっぱりだけど』

今朝観たのは夢型。

一日も挟まず観るのは本当に珍しい。

初めてと言ってもいいかもしれない。

それぐらいの貴重度。

『マスターが橋の上で天を見上げていた……でしたか？』

『いくら考えても何故そうなったのか検討もつかない』

場所はおそらく冬木大橋。

その長い端橋の高さ五〇メートル以上あるアーチの頂で、未来は
仁王立ちをしながら、何故か月を見つめていた。

本当に何故か。

その表情には感動は無く、ただただ無表情。

吹きぬく風にもそ知らぬ顔をし、両腕をだらりと垂らして。

微動だもせず突っ立ったまま、未来視は終わった。

何がしたかったのか、どういった経緯でそうなったのか……いく
ら考えても分からない。

少なくともぶらりと橋を登ってくる、なんていう展開には通常は

ならない。

そもそもどうやって登れという。

『でも、そんな未来が来るんだよなあ……………』

近い未来。

この命が尽きる前に。

『まだ分かりませんよ』

『……………え？』

『あなたは未来を変えるのでしょうか？　ならば、観た通りの未来が訪れるとは限らない。そうでしょう？』

キャスターの言葉に、未来は言葉を返さない。

返せない。

その通りだと、とっさに返す事が出来ず、逆に言葉を詰まらせてしまう。

未来は変わらない。

変えたいとは思っても、信じることが出来ない。

それが未来の思いだった。

今までの短い生涯で散々思い知った真理。

『……………今までは変らなかつたかもしれない。ですが　今は私がいます』

キャスターは未来の思いを理解した上で言う。

『一人では駄目かもしれないませんが、二人ならきつと』

明るい未来を夢見て、最後まで祈り続けた少女の言葉。

生きた年月だけで言えば、未来より数年長いだけだが、その重みは計り知れないモノだった。

信念が違う。

生きてきた環境が違う。

背負ってきたモノが違う。

キャスターからすればこの時代の、この国の人間は非常に恵まれている。

戦争も無く、家族や仲間と笑いながら食事が出る。

まさに夢のよう。

「ああ……」

未来はそんな夢の様な時代に生まれながら、恵まれなかった。感情は麻痺、人格も歪み、あげくは幼くして苦しみながら死んでいく。

希望と絶望を互いに背を向けながら二人は見つめる。

いつか、二人が同じ方向を見る日が来るのだろうか。

いつか目を合わせる時が来るのだろうか。

それは　まだ誰にも分からない。

12 心の内は理解不可

それは偶然で唐突だった。

キヤスターが気づいた時には、時既に遅し。

「敵意を感じればすぐにでも逃走できるように算段をつけておきま
す」

「……うん、頼む」

簡単に言えば、サーヴァントと遭遇してしまった。

そんな非常事態。

場所は商店街。

帰りに何となく寄ってみただけのそこに、気がつけばサーヴァン
トがいた。

Tシャツにジーパンいう現代風、だがこの冬の季節には不釣合い
の格好をした大男。

未来視で観たライダーらしき英霊である。

「うむ。これがタイヤキというものか。なかなかの美味だな」

「お前なあ……」

「でも、あつちは気づいてなさそうだぞ」

敵意どころか、警戒一つ無し。

隣にマスターを連れ、堂々と買い食いをしている。

常に気を張りつめているキヤスターからしたら、呆れしか出てこ
ない。

話には聞いていたがこんなにも考え無しの男だったのかと。

かの征服王イスカンダル。

倉庫街でライダーは現れるや否やそう名乗った。

そして、セイバーとランサーに自らの臣下になれと言いつつ。

その事を聞いていたキヤスターは、聖杯から得た知識における征
服王と、目の前のサーヴァントを見比べて、歴史とはあまり頼りに
ならないものだと思ったそうだ。

英霊など所詮伝承上の存在ではない。

その人物がどんな生涯を過ごし、どんな性格で、どんな想いを抱いていたのかも、あくまで伝承からしか分からない。

それを伝え聞いた者達が、各々に英霊像を作り出す。

自分とて同じ、あくまでこの時代に生きる人間は　いや、自分が生きていた時代においても心から理解してくれた者などいなかった。

あくまで空想上の存在。

それがキャスターの英霊に対する見方だった。

『このままマスターはライダーから離れてください。私は監視を続けます』

『……分かった』

返事をし、家へと帰ろうとした時。

「あ、瀬田くん……」

「あ……」

ライダーの影からひょこりとコトネが現れた。

「なにしてるの、そんな所で？」

「えーと、タイヤキをお母さんと買いに来たら、このおじさんがそれはなんだ？』って」

良く見れば、コトネの隣には昨日学校に迎えに来ていた女性がいる。

なるほど、親子仲良く身が温まるタイヤキを買いに商店街に来て、そうしたら不運にもこの大男に絡まれたと言っ訳だ。

未来は計三個目になるタイヤキを頼張るライダーを見て、少し思考の整理をしていた。

セイバーと遭遇した時は、恐怖が真っ先に身体を支配した。

だが、今はどうだ。

恐怖も畏怖も無い。

ただただ呆然とするばかりである。

「お、なんだ坊主。お主もこのタイヤキを食いに来たのか？　美味

いぞ、これは」

「いや、お金無いんで……」

「それなら余が」

「だ、か、ら……それは僕の財布だろうが！」

「細かい事は気にする出ない」

気づかれない内に退散する目論見も破綻し、目を付けられたとうのに、未来にはまだ焦りは生まれなかった。

むしろ、目の前で広げられる漫才に溜め息すら出た。

「別に結構ですから」

脅威からではなく、面倒事から逃れるかのように後ずさる。

おそらく相手がサーヴァントでなくても、同じ反応であったらう。

「いやいや、遠慮するでない。子供はもつと我が儘であるべきだ」

「はあ、そうですね……」

威風堂々ともいうのか、胸を張り偉そうに振る舞うライダーに
対し、冷めた反応の未来。

未来にとって炎に並んで死の象徴であるセイバー程とまでいかな
くても、もう少し危機感を掻き立てられるものかと思っていたのだ
が、拍子抜けとも言っていい位に冷静だった。

強がりではなく、本当に。

これがライダーではなくアーチャーやバーサーカーなら、そうは
いかなかっただろうが。

この時点でのライダーの印象は、未来視を含めて、破天荒な馬鹿。
他のサーヴァントのように他者を蹂躪し、地を抉る様を観ていな
いのだ。

危機感を感じないのは、ライダーの性格に加えて、ライダーの危
険度を知らない故。

未来を観る未来にとって、未知は恐怖ではなく救いなのだから。

「お前、あんな子供にまで呆れられてんぞ……」

もはや諦めにも似た表情で隣に立ち、手を顔に当てるライダーの

マスター。

これは同情するべきかもしれない。

「あの……瀬田くん」

どさくさに紛れて姿を消そうとしていた所で、それを止めたのはコトネだった。

正直なところ、未来とコトネはそれほど仲良くない。

そもそも未来には友達がない。

クラスメートの名前すらも遠坂の様に目立つ人物しか記憶していない。

未来は何故か忘れやすく覚える事が得意ではないのだ。

なので、コトネの名前も覚えていない。

遠坂がコトネの呼ぶ事を知っている程度だ。

会話だって、昨日を除いても二三回交わしたかどうか。

それだけの関係。

だから、こうしてコトネの方から声をかけてきたのは意外でもあった。

彼女も人と積極的に関わろうとするタイプではなかったから。

「これ……食べる？」

コトネが近づき渡してきたのはタイヤキ。

茶色の紙袋に入った二匹の片割れ。

「いや、これキミの分でしょ」

貰えないと。

というより、ライダーが一方向的に言ってきただけで自分はタイヤキを食べたい訳ではないと。

そう申し出を断る。

「でも……瀬田くん、悲しそうな顔してた」

「……え？」

彼女の言葉の意味が、意図が理解できなかった。

いきなり何を言ってるんだ……そう脳は処理をした。

「悲しそう？」

誰が？

自分はそんな顔をした覚えもつもりもない。

「……うん。だから本当は食べたいのかなって」

悲しそうな顔と物欲しそうな顔は違うとも思ったが、それはささいな問題だろう。

純粹な気遣い。

同情の類なのかもしれない。

友達のいない寂しい人間に対する。

だが　自分はそんなにも分かりやすい顔をしているのだろうか。そう未来は近くにあったガラスに映る自分の顔を覗き込む。

いつも通りの顔。

冷めたような無表情。

なのに、遠坂といい、コトネといい、何を根拠に人の表情を読み取っているのだろうか。

「……半分こ」

小さな手でタイヤキは二つに分けられる。

湯気が温もりを伝えながら、未来の手を待つ。

『貰ってあげてはどうですか？』

『いや、でも……』

意地を張っている訳ではないのだが、何だか素直に貰いにくい。

一体何が『でも』なのかは未来自身分かっていない。

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

やがてコトネの真っ直ぐな視線と間に耐えられなくなり、ゆっくりとタイヤキに手を伸ばす。

思っていたより冷えた手が、暖かさを得て全身にそれを伝えていく。

未来が受け取ったのを確認すると、コトネは嬉しそうに微笑み、太陽の様に眩しかった。

コトネに貰ったタイヤキは、ライダーが絶賛するのも頷けるくらいにおいしかった。

それ以上に身体が温まるような感覚を感じた。

そんな状態で、未来は帰宅。

キャスターはライダーに気づかれないように追跡中だ。

今は何やら、まだ街をうろついているらしい。

そして、部屋に戻ると、ベッドに体重を預けた。

未来視。

それはまた突然起きた。

家にもうすぐ辿り着くというタイミングでの白昼夢型。

段々と視界が今ではなく、未来だけを映していく。

このままでは今を見失う。

単純に言えば意識を失う。

そう判断した未来は、母親に気づかれ心配されない内に部屋へ駆け込んだのだ。

け込んだのだ。

そうして、未来を観る。

『どうしたのですか、ライダー』

そこは夜。

登場人物は先見たライダーとそのマスター、そしてキャスター。

霊体ではなく実体化をしている。

『戦わないのですか？』

いつもとはまるで雰囲気の違いキャスター。

不適に嗤い、挑発的。

その身に纏う色は正しく黒。

『さあ、始めましょうか』

そこで未来視は終える。

その先はまだ分からない。

13 現実を侵食する夢

夢を観た。

それはただの夢ではなく、かと言って未来視でもない。

それ以外の何か。

そう、感覚で悟った。

血が、死が溢れる戦場。

そこに立つのは一人の少女。

甲冑を纏い、旗を持つ。

少女は人を殺したくなかった。

だが戦わなくてはならなかった。

それが彼女の使命だったから。

年若い十代後半の少女に過ぎなかった彼女は、不安のあまり泣き出すこともあったが、それでも逃げ出さず勇敢に戦場へと赴いた。

命の危険を曝しても尚、突撃を繰り返し、ついには見事勝利をその手に。

凛々しく、気高いその姿に人々は魅了され、歓喜した。

そして、彼女は

「はあ、はあ……」

意識を取り戻した未来は乱れた呼吸を正そうと気を落ち着かせる。

白昼夢で意識を失う……そんな事は初めてだった。

いつもより、昼間に学校で観た時以上に視界が未来で埋め尽くされ、思考すら観る事だけに専念させられる。

まるで、生きる事より、その事の方が重要だともいうように、

そして、未来視を終えると同時に、視界は闇へと切り替わり、思考も投げ捨てられた。

部屋まで辿り着けたのは幸い。

道端で倒れたりしたら、大事になりかねない。

どれだけ眠っていたのかは分からないが、身も心も休まっていなのは確か。

むしろ、疲労感が増している気さえする。

何か異常な事態が未来を侵食している。

あまりにも頻繁に未来視が起きすぎだ。

このままでは、いつか今が見えなくなるのではないだろうか。

そんな疑念すら湧いてくる。

「それに、今のは……」

未来視の後に観た夢。

そこにいたのは、見間違える事無くキャスターだった。

未来視で観たどこか禍々しい雰囲気はなく、今以上に気丈に振舞わんとした一人の少女。

実際は、未来からしたら年上なのだから少女という呼び方はおかしいのかも知れないが、そこにいたのは紛れも無く少女だったのだ。

未来の知らないキャスターの姿。

未来はキャスターの真名を知っているが、その伝承は知らない。

それは他の英霊も同様であり、どれだけ偉大な人物で、どんな壮大な人生を歩んできたのか想像もつかない。

調べてみるというのも手かもしれないが、今まではそんな気にもならなかった。

そんな事をして無駄でしかないと思っていた。

でも　今はキャスターの事が気になっていた。

英霊というからには、キャスターは自身の人生を一度終え、死を経験しているという事である。

彼女はどんな想いで生涯を生き抜き、死んでいったのだろうか。

聖杯に託す願いは無いと言った彼女は、何の後悔も無く、満足し

てその人生に幕を下ろせたのだろうか。

「なあ、キャスター」

別に何かを問おうとした訳ではない。

ただ、話が出たかった。

それだけだった。

「……キャスター？」

いつもの要領で念話を試みたのだが返事が無い。

それどころか手ごたえも無く、ただ頭の中で言葉を呟いただけの
様にも感じる。

繋がった感覚が無い。

そう言えば、ある程度距離が離れると念話が繋がらなくなるかも
しれないとキャスターが言っていた気もする。

そんな事は、今まで起きなかつたので忘れていたが。

窓越しに外を覗くと、空は陽が落ちかけていて、仄かに赤みがか
かっている。

キャスターは、ライダー達を追っていたはず。

このまま、キャスターから連絡が来るまでここで待っているべき
なのだろうか。

キャスターの身に何か起きたとは考えられないだろうか。

身体をベッドから起こし、立ち上がると、そのまま部屋を出た。

「あれ、どこか出かけるの？」

「うん。ちよつと散歩」

少し考えたが、部屋でじっとしている事は出来なかつた。

余計な事を考えてしまいそうで、嫌な事を思い出してしまいそう
で。

更に不安と焦りが加わり、無心に待つ事は叶わない。

「あのねえ、昨日迷子になったばかりでしょうが。それに、そろ
そろ夕ご飯の準備も始めるし」

「大丈夫だって。すぐ帰ってくるから」

母親が心配してくれたが、それを振り切り、靴を履き終えると、

玄関のドアに手をかけた。

「じゃあ、行ってきます」

「……はあ、行ってらっしゃい」

『おーい』

とりあえず家の近所を確認し、その後商店街に。

時折念話で叫ぶが、反応は無し。

周囲からしたら、迷子の子供が不安がってキョロキョロとしているように映るのだろう。

何人かが心配そうに未来を見てくる。

それを未来は無視して進む。

当ては特に無く、ぶらりと。

「あまり遅くなると心配するしな……」

自身の危険もあるが、母親に心配をかけるのも気が引ける。

キヤスターは無事で帰ってくると信じ、帰路に付くべきかどうか

……未来はぼんやりと、視線の先にある公園を眺めながら考える。

無邪気に遊ぶ子供達の声を聞き流して。

そう言えば、あんな風に遊んだ覚えがあっただろうか。

おそろくなかっただろう。

記憶を掘り起こすという行為は何故か、踏み切れないので止めておく。

理性の奥で何かがブレーキをかけているのだ。

だから、おそらく手を打つ。

冷めた目と思考で生きてきた未来は、まじめに生きる事を諦めていた未来は大抵一人だった。

孤独を気取るわけでもなく、それなりに人との関係は持って生き

てきた。

ただ、心を許した人物がいらないだけ。

許された人物もいない。

両親はさすがに、心を開いてくれているが、それでも未来の方が開いているのかは定かではない。

両親はどこか他の子供と雰囲気が違う未来を心配し、未来は相談もせず一人で黙り込む。

より幼い時、未来視を受け入れられていなかった時など、訳の分からない事を突然言ったり、理解の出来ない奇行をしたり。

やがて、精神が歪んで成長し、今のように落ち着くを通り越し冷めるようになった。

いまだ普通に接してくれている両親には感謝すべきなのだろう。

だからこそ、余計な心配をさせるのも心苦しい。

学校などではまだ、周囲の精神年齢が幼いからこそ、ちよつと変わった奴程度の認識で留まっているかもしれないが、いずれ不気味に変わる。

全てを見透かしたような、不快な存在。

……もつとも、そうなる頃には既に未来はいない。

もうすぐ死ぬのだから。

炎に包まれ。

誰にも理解されず、一人で。

「あ……」

公園を眺めていると、近くに奇妙な人影がある事に気づいた。

よれよれのパーカーに身を包み、フードを深く被った誰か。

不恰好に地に座り込んでおり、物陰に隠れている為か、他の人達は気づいていない。

まるでそこらに捨てられたゴミのかのようで、そこにある意味溶け込んでいた。

「何してるんですか、こんな所で」

その人物を視界に捕らえた時、未来は何の躊躇いも無く歩み寄っ

た。

どこかで見た気がする……そう引つかかったからだ。顔も見えていないというのに、感覚的に、直感的に、すぐ傍に近寄っても、声をかけても反応は無い。

壊れた人形のように、ただそこにおいて、俯いた顔も上げない。

白髪がちらりとフードの隙間から覗き見えるだけ。

どこかで見た気がする」と述べたが、未来に白髪の知り合いはいない。

だが観た覚えはある。

つい最近。

夢の中で。

「……桜」

「ッ!？」

その名を呼んだ瞬間、身体を大刻みに振るわせた。

今にも跳び上がりそうに。

そして手で顔を隠しながら、ゆっくりと未来を見上げる。

顔を見ても、今一ピンと来なかったが、あの未来視で観た男は地に伏っしていた事を思い出し納得した。

顔自体は初見。

だが、確信した。

あの男と、この男は同一人物だと。

「君は確か凜ちゃんと一緒にいた……」

弱弱しく、今にも命の灯を燃やし尽してしまいそうな程に儂い。

「いや、確かにクラスメートだけど」

何で知っているんだろうかと、自分の事を棚に上げて疑問に思う。口ぶりから察するに、一緒にいたのを目撃したというのが妥当である。

昨日など、街をあちこちと彷徨っていたのだから、目撃されている可能性はある。

……実際は、使い魔で覗き見をしていただけなのだが。

「で、こんな所で何を」

問いを改めようとした時、あるモノに目が止まり、口も止まった。男の右手の甲に刻まれた独創的な文様。

思わず自分の右手を見てしまう。

今は 外出時は常に手袋をはめている為見えはしないが、その奥にある令呪を確認するように。

そして、悟った。

この男は自分と同じく聖杯戦争に参加するマスターなのだ。

この死にそうな男は、命を賭けて戦い、最終的に命を落とす。

聖杯戦争の間か、その後かは知らないが、この様子からすると間もなくだと言われてもうなずける。

「はは……なるほど」

乾いた笑い声を漏らしたのは未来。

ライダーのマスターがああも元気にサーヴァントと言い合いをしたいから失念していたが、未来達は殺し合いの真っ最中。

そして勝者は一人。

生き残れる確立の方が遥かに低い。

敗北しても、運がよければ生き残るかもしれないが、この男に限っては観てしまっている。

死を。

無残な最期を。

「……さつき、君はどうして『桜』といったんだ？」

未来のおかしな態度も気にせず、何も無かったように問いをかける。

確かに偶然呟くにしては季節はずれな単語である。

それも、わざわざ近づいて。

意図しているようにしか思えない。

「なんとなくです」

何故知っていたかを省くと、理由は本当になんとなくである。

見覚えのある気がした人物を見かけたので、なんとなく気になり

声をかけた。

桜という単語を選んだのは、それ以外に確かめる術が無かったというだけ。

「僕って勘が良いんですよ。昔から」

仮にも敵なのだから、未来が観えるとは言わない。

だから、勘という事で誤魔化す。

無理があるかもしれないが、客観的に見れば未来はただの子供。

納得は出来なくても、ムキになって突っかかってきたりはしないだろう。

「ですから、忠告しておきます。このままでは、あなたは誰も救えない。無惨に死んでいくだけです」

そう言っただけで未来はその場を去る。

後ろから引き止める声も聞こえたが、聞こえない振りをして。

忠告なんてしても無駄だという事は知っている。

こんなものは忠告でもなんでもない、何もせず見殺しにしたという事実を誤魔化す為の言い訳作りだ。

「……そろそろ帰るか」

14 見失いゆく現在

家に帰る。

それは至極単純な事。

知らない場所に放り込まれたのならともかく、家の近所。

見知った道。

記憶のままに進めば、まず迷う事は無い。

なのに 未来は確実に家から遠ざかっている。

誰かに惑わされたわけでもない。

あえて言うなら、惑わしているのは未来自身だ。

「こんな事、今まで無かつたんだけどな……」

呼吸が乱れているのは、単に体力を消費しているからなのか、精神が乱れているからなのか。

客観的に見れば普通に歩いていただけで、特に疲れることはしていなかったが、主観的だと少々違う。

目に見えるものが違うのだ。

まだ夕暮れ時のはずなのに、未来の景色からは光が失われている。まるで夜。

またしても白昼夢の予兆が来たと思えば、視界が未来を映した。

それはいつも通り。

今度は意識を失うなんて事もなかった。

だが 終わらない。

いつもと違う異常な状況。

未来観える時点でどう考慮しても度し難い程に異常だが、その異常がさらに異常で上塗りされている。

無意識下に観る夢型の未来視なら、長時間発現する事もあった。

しかし、意識を保っている状態で観る未来視は、短く打ち切られるのが常だった。

それこそ、白昼夢で済む程度に。

数秒、長くて数十秒。

こんな風に視界に纏わり付いて離れないのは初めてのパターンだ。それに、これはさっきのにも当てはまるが、白昼夢型は完全に未来で塗りつぶしたりしない。

少なくとも、うつすらと現実も見えていた。

だというのに、今は現在が夜だと納得してしまえば、異常は無い様にも観えてしまう程に未来一色。

ただ時間がずれているだけ。

観えているのが今ではなく未来なだけ。

じつと立ち止まっていても解決しなさそうなのは肌で感じとっている為、異常を無視して帰ろうとした

あくまでいつも通り。

そう、思っていた。

未来視は、客観的視点だ。

だからこそ未来自身の姿も映る。

普段は未来視をしながら移動しようなんてしないから問題は無かった。

寝ている最中なら動くななんて出来るはずがなく、起きている最中でも短時間な上に現在も同時に見えいていたから。

落ち着くまで誤魔化していた。

こうして未来視をしながら歩いていると、自分の身体が自分のモノではないと錯覚を覚えてきそうである。

なんせ、観える景色の中に自分が混じっているのだ、観ている自分と重ならなくなるのも仕方ない。

むしろ身体がいつも通り動いている事に違和感と恐怖を感じてくる。

「くっ……」

眩暈と頭痛が襲ってきた事で、目を閉じ、再び開くと光が眩しくて細めた。

思わず両の手のひらを開いたり、閉じたり。

自分の身体である事を確認し、安堵する。

そして、そのまま緊張の糸が切れたかのように、ゆっくりと力が抜け落ち膝を付く。

「あれ……？」

段々と手に力が入らなくなり、開いたまま両手も地面に。

意識が朦朧と揺らめき、虚無へとなる。

倒れる未来。

それを見下ろす影があった。

黒い影。

通常なら目視する事のない霊体の異常な影。

暗殺者のサーヴァント、アサシン。

聖杯戦争に参加する者からすれば、瀬田未来は怪しむには十分足る存在だった。

まず、アサシンが最初にキャスターを補足した時の事。

遠坂凜が目的だったと判断するのも可能であったが、それにしてもキャスターは遠坂凜を気にしていな過ぎた。

学校に辿り着くと、遠坂凜をつける事なく、自身が監視されている事に気づいたのか適当に動きを見せた。

それは出鱈目で錯乱させるのが目的だと見て取れる。

だが、その監視の過程でアサシンはキャスターがつけていた三人の子供の内の一人を発見していた。

その時点では、特に気には留める事もなく、一応マスターに報告しておいた程度だったが、ライダーやバーサーカーのマスターを監視するにあたって接触してきた事で、無視する事ができなくなってきた。

実際、それらは偶然だったが、必然でもあった。

未来の人生に真の意味での偶然は無い。

全てが必然で、予め定められていた道を歩むだけの人生。

だからこそ退屈で、運命に囚われているように感じる。

ライダー達に未来が遭遇したきっかけは、何となく商店街に寄った事。

バーサーカーのマスターだって、適当に歩いていた先に隠れるようにいたのを偶々発見した。

振り返ってみれば出来過ぎている。

偶然で片付ける事は容易い。

こんな子供が、それも魔術師の家系でもない者が、聖杯戦争に関わっているはずがないと。

だが、疑えば疑うほどに怪しいのも事実。

現に、アサシンのマスターの綺礼は疑い、今も疑っている。

このままでは、あなたは誰も救えない

無惨に死んでいくだけです

未来はバーサーカーのマスターにそう言った。

まるで未来を見透かしたかのように。

全てを知っているとでも言うように。

その姿はただの子供とは纏っている空気が違った。

そうして、ついに気にかかった綺礼は、アサシンに未来を追跡するように命じ、感覚の共有により、綺礼はアサシンを通じて倒れる瞬間も見えていた。

無機質な目で、機械のように歩み、突然崩れる瞬間を。

別にアサシンに手を出させるつもりは無かった。

今は人気が無いとは言え、いつ誰が通るかも分からない夕暮れ。

迂闊に姿を晒すのは、神秘の秘匿にあたって愚考に近い。

せめて人払いぐらいはするものだ。

……もし未来がマスターである確証があれば、事態は違ったかもしれないが。

アサシンは、ただ監視をしているだけ。

これで、キャスターもしくは他の聖杯戦争関係者が接触すれば黒へと限りなく近づく。

マスターならば、路上で無防備に倒れている状態をサーヴァントが見逃すはずが無い。

と、その時。

「こやつは……」

未来に接触者が現れた。

サーヴァントとマスターは召還時に令呪によるパスが出来る。

このパスによってお互いの場所や状況をある程度認識したり、念話をする事ができるようになるのだが、未来は未熟な為か、キャスターがどこにいるか感じる事も、一方的な念話もある程度の距離の範囲内でないとならない。

その事をキャスターはまだ知らなかった。

だから、ライダーの追跡も、ランサーの時と同じように行った。

途中念話で連絡を取りながら。

しかし、突然返事が来なくなった。

原因は、未来が未来視のせい意識を失い寝てしまった事によるのだが、キャスターには意識を失った理由など知る由も無い。

なので、すかさず未来の元に戻ろうとした。
しただが

「ん？」

その時、監視対象だったライダーと運悪く目が合った。

本来気配遮断のスキルを持たず、生前も忍ぶような事をしていなかったキャスターは尾行に向いていない。

アインツベルンの城でも、セイバーとランサーに存在はバレていた。

ただ決闘の邪魔をしなかったから放つて置かれただけ。

今後の為に情報収集が必要だとはいえ、少々無茶だったのかもしれない。

キャスターは常に戦闘の中心に立ち続けていた。

諜報活動をするにしても仲間達が行い、本人はした事がない。

根が真っ直ぐで、どこか不器用。

それがキャスターだった。

とりあえず逃げよう。

そうライダーの追跡を諦め、状況の掴めない未来へと念話で話しかけつつ向かう　　が、キャスターの啓示スキルにより、足を止めた。

予感だ。

今戻るのは不味いと。

念の為、何かあった時に対処できるだけの距離にはいようと、家の方向へと移動。

パスによって、未来が意識を取り戻したのは感じると、それを止めた。

難儀なもので、心配だから傍にいたいという思いと、傍にいとバレル恐れがあるという二つの思いがキャスターにはあった。

さらに未来からも、あまり家周辺をうろついていると疑われやすくなると言われていた。

だから、何かあれば未来の方から念話があるだろうと、いつもより離れて待機していたのだが、その結果未来は混乱するに至った。

事前にもう少し相互理解をしておくべきだった。

そして、再び意識を失ったのを感じ、さすがに非常事態だと跳んで行こうとしたところで、また同じ予感。

しかも先ほどより強い。

キャスターの中で起きる葛藤。

行くか、行かないべきか。

迷った結果、キャスターが見たのは、倒れる未来に近寄るサーヴ
アントの姿。

焼き芋を片手に歩くライダーだった。

15 終わりを迎える平穩

アサシン、ライダー、キャスター。

三体のサーヴァントがこの夕暮れの道端に集っている事に気づいているのは、アサシンのみ。

キャスターは気配を消しているアサシンには気づかず、未来に近づくライダーのみに注意を注いでいた。ライダーにいたっては、キャスターにも今度は気づいていない。

呆れるマスターを引きつれ、のん気に焼き芋を食べながら街を闊歩する。

とても命がけの闘争中だとは思えない。

「おい、無事か」

巨軀を屈めて、しゃがみ込んだライダーがペチペチと軽く未来の頬を叩く。

返事、反応は無い。

ぐったりと、完全に意識を手放した状態。

心ここにあらず。

「起きんな。では、仕方ない」

「おい、待てよ！ 何するつもりだ!？」

ライダーが未来の身体を持ち上げようとしたのを見て、そのマスターが叫ぶ。

「騒ぐでない。ただ運ぶだけだ」

「運ぶって……」

「ここに放って置く訳にはいかんだろ」

「……はあ、分かったよ。何度も言うが、僕達は聖杯戦争中なんだぞ」

ライダーの言い分はもつともであり、判断としては間違っていない。

より最適な判断としては、救急車やらを呼び、病院に運ぶ事だが、

とりあえずライダー達は、近くにあった公園のベンチで寝かせる事にしたらしい。

ライダーのマスターとしては、倉庫街での一件以降大きな展開の無い現状に焦りをい দিয়েおり、赤の他人に構っている余裕は無い。だというのに、相棒であるサーヴァントはまるで観光気分のように街を一日中歩いて回る始末。

一応、地理の確認という名目はあるが、こんな事をしていて大丈夫なのだろうかという疑念は浮かんで消えない。

とは言っても、彼は非情では無く、どちらかという甘い性格をしている。

幼い子供が倒れているのを素通りするというにも気が引けたのだろう。

ライダーが未来を背負って歩くのに渋々ながら付いていく。

『くっ……っ』

そんな二人を苦い顔持ちでキャスターは追っていた。

自らのマスターが敵の手に、奪おうと思えばあっさりと奪えてしまふ位置に置かれている。

こんな状況で落ち着いていられるはずがなく、かと言って今出て行くのはいささか考え無しの行動。

まだ、この時点では誰も未来がマスターだとは気づいていない。なら、狙われる謂れはない。

……関係者とも分からぬ人間を殺すような非道な殺人鬼でもない限り。

結局、キャスターは警戒しながらも見守るしかできない。

正直な話、非力な未来がマスターだと知れば、偽りだったとはいえ今まで教授していた平穩は崩れ去る。

呑気に学校に登校したり、気軽にうるついたりなんて行動は出来ない。

常に神経をすり減らし、注意に全力を注ぐ。

それぐらい未来は未熟で非力なのだ。

魔術師でなくとも、ナイフを持った大人にでも襲われれば簡単に命を落としてしまう。

命の安否を優先するのなら、未来は仮病を使ってでも家に籠って
いれば良い

キヤスターに全てを投げて、託せば良い。

なのに、当の未来はそれを嫌う。

何もせず、じっとしている事すら。

何もしてなかったら炎が観えるんだ

僕を殺す炎が

今にも襲ってくるんじゃないかっていう位に

未来は自分の死を観た。

だからこそ聖杯戦争なんてものに参加してるのだ。

じっとしてるだけで生き残れるだなんて僅かたりとも思っていない。
しない。

「マスター……」

公園に付いたライダーは、適当なベンチに未来を下ろしていた。

さっきまで未来がいた公園。

バーサーカーのマスターはもういない。

「……なあ、服とか脱がした方が良いんじゃないか？」

「確かに、暑そうだのう」

厚着をしているからというのものもあるが、冬だというのに未来は身体中に熱を巡らし、衣服を湿らすほどに汗を流している。

その顔は悪夢でも観ているのか、苦痛で歪み、時折呻き声も漏れている。

「って、おい！？ だから、お前は何やってんだ！？」

「衣装を脱がすのであろう？」

「だからって無理やり脱がさなくても、ファスナーを下ろせば良い
だろうが！」

未来は防寒着としてジャンパーを羽織っている。

それを脱がそうとしたのだろうが、豪快と言っているのか、大雑

把と言っべきなのか、ライダーは前にあるフラスナーを無視して強引に脱がそうとしていた。

巻き込まれるように、下に来ている服まで捲り上がり、この寒空の中、汗でびっしょりなのだ、風邪でも引きかねない。

何だかんだで心配しているのか、ライダーのマスターがそれを止めさせ、代わりにフラスナーを下ろし、前を開けた。

「寝かしたままじゃ脱がせられないな。後は……この、汗で濡れたこいつを外しておくか」

と言って、凍えるように冷たくなった手袋を外した。

令呪のある方とは逆の、左手。

『　っ！』

このままではいけない。

そうキヤスターはとっさに判断した。

右手に刻まれた令呪を見られれば、未来がマスターであるという確固たる証拠となる。

言い逃れは出来ない。

しかし、かと言って、ここでキヤスターが直接止めに入ったのは本末転倒。

今まで潜んでいたサーヴァントが、何故このタイミングで現れるんだと疑われる。

しかし

未来の手袋が捲れて行く。

迷っている猶予は無い。

有無も無く霊体化したままのキヤスターが、ライダーの気配探知内へと飛び込んだ。

「ほお……」

「どうしたんだ、ライダー？」

間一髪。

ずれた手袋の隙間からは未来特有の文様が覗き見ていたが、ライダーもマスターも気づいた素振りはない。

……そう、二人は。

「先刻、見知らぬサーヴァントを見かけたと言ったであろう。そやつがまた近くにおる」

「な！？　じゃあ、狙われてるって事か！？」

「いや、敵意は感じん。視察か……はたまた他の目的があるか」
現在公園には、人はいない。

陽が随分と落ちた事で、暗くなったこの時間帯に遊ぼうと思う人は少ないだろうから当然といえば当然。

加えて、肌を震わせる寒さ。

さらに、倉庫街やホテルの爆発事故という原因不明の恐怖の影により、冬木の住人達は不安を隠せずにいる。

夜間の戒厳令がしかれつつある。

よって、まだ夜の始まりと言っても、街を歩く人は少ない。

未来の母親も今頃心配している事であろう。

「……しまったな」

「お、目が覚めたのか、坊主」

暗い空を前に横たわる未来は意識を取り戻して、身体を起こしながら弱弱しくも呟いた。

左手は右手の甲を包むように押さえていて、ずれていた手袋は直っている。

汗も止まり、呼吸も落ち着きを取り戻している……が、どこか霧困気が暗い。

声色か、目の色が、全体的に落ち込んだ、諦めた印象を与える。

「ええ、おかげさまで。僕は気を失ってたんですか？」

「おう、道中で見つけてな」

ライダーは未来と向き合うが、マスターの方は気が気でない。近くに敵サーヴァントがいると言われて、警戒しない方がおかしい。

傍には無関係……だと思っている子供までいるというのに。

「ライダー……」

小さな声でライダーを呼ぶ。

何を気楽に子供と話しているんだと。

すると、その様子を見た未来が言葉を挟む。

「ありがとうございます。もう帰りますから大丈夫です」

外れた左手用の手袋をポケットにしまい、ベンチから足を下ろし立ち上がる。

『帰ろう、キャスター。お母さんも心配してるだろうし』

『え……はい』

突然話しかけられた事でキャスターは戸惑った。

未来はキャスターを捜していたはずなのに、近くにいる事を知っていたかのように。

自然と、流れるように。

……実際、知っていたから、観ていたからなのだから。

意識を失っているように見えても、観ていた。

事前に。

「おい、一人で大丈夫なのか？」

「ええ、家も近くですから」

そうして未来は公園を出て、その後に、別の出口からライダー達が出る。

それを確認したキャスターは、しばらく公園に留まった後に移動した。

ライダー達が未来と逆方向に向かったのは、キャスターを意識したので。

交戦になるのなら巻き込むわけにはいかず、おびき寄せるにしても人がいない方がいい。

当のキャスターは公園を動かず、そのままライダーの気配探知能力の範囲外に出る事になったが。

もう一度公園に戻ってみた頃にはもぬけの殻。

キャスターは消えていたという訳だ。

『あの、本当に大丈夫なのですか？ 二度も気を失われたようです』

が

『多分心配する事じゃないと思うよ。未来視の副作用みたいなものだし』

『……そうですか』

それから無言で歩く未来と、遠くから見守るキャスター。

暗くなった夜道を一人歩いていく。

『ああ、そうか。さっき観たのはこれなのかな』

『また、未来視ですか？』

『うん。今みたいに暗いここを僕が一人で歩いてた』

あの時、歩いているように見えたのは未来の自分。

あの時の未来も歩いてしたが、それは未来の意識の範囲外。

現在を見失い、未来だけが観えていた。

『段々この力について分かってきたかもしれない。……まあ、今まで目を逸らしていただけで、最初から分かっていたのかも知れないけど』

未来にとって未来視とは不必要で、忌むべきものだった。

幸をもたらした事などなく、人生を阻害するものですか。

そして、未来は知っていたからこそ、この力を心の奥で恐れていた
いつか、自分の意思が押しつぶされ、消え去ってしまうのではと。
本当に現在を見失ってしまうのではと。

……しかし、それは結局生きている事を前提とした不安。

この先死んでしまうのならば、そんな不安は意味を失くす。

だから、開き直ってしまうべきなのだろうか、未来は悩んでいた。

それが最善なのではと。

唯一自分ができる足掻きなのではと。

未来は立ち止まり空を見上げる。

そこは偶然にも、ついさっき未来が倒れた場所。

いや、偶然でもなんでもない。

観たくなかったから強制的に意識を切った。

それだけだ。

冷静に思い返せば、未来視で未来の姿が映ったのは久しい事。未来が時を過ぎすにつれて、自分に関する未来を観る事は少なくなっていた。

直接自分の行動を観るのはさらに。

それには二つ大きな理由があるのだが、その一つは未来を完全に確定させないための僅かな抵抗。

自分がどこで何をするかまで知ってしまったえば、自分から自我が失われ、淡々と予定調和のように行動をなぞるだけの日々を送るので、はという恐怖からくる抑制。

箱を空けなければ中がどうなっているのか分からない。

未来は言葉でそれを否定しながらも、それに縋っていた。

まだ、望みはあると。

だからまだ、命からがら何とか生きています。

絶望や諦めといった感情に比べれば、一パーセントに満たない、無いに等しい位の比率だが存在する希望、もしかしたらという思いだけが未来を繋ぎ止めている。

未来は全てを知るのが怖いのだ。

『マスター！？』

無心に空を眺めていた未来の身体がぶれて、後方に跳ぶ。

そして、その寸前を何かが通り過ぎた。

短刀の投擲。

それを交わせたのは、キャスターが未来の身体を引いから。

緊急事態ゆえに、許可の無い実体化。

月夜の下に、姿を現したキャスターが、己がマスターを殺さんとした襲撃者を睨む。

白い髑髏の仮面を被る黒い影。

暗殺者と、武器持たぬ騎士の対峙である。

16 無力な自分

未来の召喚したキャスターというクラスは、最弱のサーヴァントと言われている。

魔術を主体とするキャスターは、三騎士を初めとする高い対魔力をもつサーヴァント相手では基本的に不利であり、戦闘に関する能力も低い。

だが、陣地作成で有利なフィールドを築き上げることで互角以上に戦うことが出来る。

つまり、本来なら工房を構えての迎撃戦が定石。

自らが敵陣に攻め入ったり、工房の外を迂闊に移動するのは愚策とも呼べぬ、無策。

自殺行為に等しいものだった。

そんな最弱のサーヴァントのマスターが、外を無防備に歩いているれば、狙わぬ道理は無い。

この好機を逃せば、工房に籠城される可能性もあり、そうなれば面倒となる。

少なくとも、ここで排除する方が遥かに容易いはず。

そうだった判断が、アサシンに伝わり、暗殺の実行となった。

……その初撃はキャスターの妨害によって回避されたが。

啓示によって、アサシンが短刀を放つより先に動いていたキャスターによって。

遠坂邸での茶番を知らないキャスター達以外には、アサシンはすでに退場した事になっている。

派手に動けば、これまでの策が崩れ去り、アサシン陣営、いやアサシン陣営と組んでいるアーチャー陣営が不利になりかねない。

だから、気配遮断を持って闇に紛れながら素早く、確実に未来を殺さんとする。

どういった経緯で子供が聖杯戦争に参加しているのかという疑問

も排除して。

『撤退します、マスター』

『……どうやって』

未来にはアサシンがどこにいるのか、先の短刀がどこから飛来して来たのかも見当が付いていない。

肌で感じることもできない敵の視線に筋肉を萎縮させて、警戒するのみ。

『とりあえず 失礼します』

「え……」

思わず声に出してしまった。

身体がいきなり浮上し、キャスターの肩へと腹からかかる様に持ち上げられる。

手足がだらりと情けなく垂れている。

『このまま運びます』

返事も待たずキャスターは、未来を抱えて駆け出す。

女性とは言えサーヴァント。

人の力とは比べ物にならず、未来は身体が小さく軽い。

持つのにも苦労が無く、そのまま移動するのが最速な逃亡手段だ。短刀の投擲をかわしながら全速疾走で街を行く。

だが どこへ逃げるといふ。

未来の自宅へ駆け込んだところで、逃げ切ったとは言い難い。

家を知られれば、常に暗殺の影に脅えなくてはいけない。

最悪、家に帰らないという手も残されているが、それは本当にどうしようもなくなった時の最終手段。

それに、万一家族が人質にでもされたら、それこそどうしようもなくなる。

完全にアサシンを振り切るしかない。

しかし、逃げ切る手が見つからない。

必死のキャスターの肩の上で、無力な未来が自分の唇を噛む。どうせ死なない。

自身の死因は短刀なんかではない。
そんな風に楽観的にはいられない。
文字通り手も足も出せない。
ただ委ねるだけ。

未来を知りながら、何も変えられなかった無力な少年。

諦める事で、希望を持たないように心がける事で、絶望を軽減させようとしていた。

それでも、もしかしたら　そう思って、未来はキャスターとい
る。

なら、このままでいいのか。

このまま諦めたまで、未来は変わるのか。

どうせ変わらないのなら、どうせこれが最後なら

せめて何もしない後悔だけはしたくない。

何もしなければ、ここにいない意味が無い。

キャスターがいる意味も無い。

だから　立ち向かえ。

生まれてからずっと付きまわってきた呪縛と。

避けてきた未来と。

未来は瞼を閉じ、意識を集中させる。

未来視はふいにやって来る。

それは何故か。

未来だって人間、常に気を張ってなどいられない。

未来は常に未来を観ないように、未来を思い出さないようにして
来た。

観たくなつてないから。

観ても意味など無いから。

それは忌むべきものだから。

だけど、今はかりはそれを止める。

未来視を妨げる防御本能を押さえ、自ら未来視を起こす。

そう、思い出せ。

記憶の海から探り出し、手繰り寄せろ。

未来はすでに記憶している。

後は、思い出すだけ。

観るだけ。

意識を現在から未来に。

未来を映し出せ。

未来の未来視。

それは映像によって未来を観る事である。

だから、視界が支配される。

しかし、実際に未来が未来を予知しているのと、観るのとは時間的にズレがあったりする。

それは、未来を映像として記憶する　それが未来の本当の力だ

から。

だが、脈絡の無い記憶があったところで思い出すなんて、何か切欠でもない限りそうそう無い。

おまけに、未来の本能が抑止として働いていたのだから尚更。

故にしばらく脳の片隅に未来は保存され、ふいに未来視として映し出される。

もちろん、未来全てを記憶している訳では無い。

未来を記憶するのにも条件はある。

それでも　何かがあるはずだ。

今、この状況を変えられる可能性を持つ何が。

そうやって、今まで拒絶していた未来を直視しようとした。

そうして　意識は失われた。

『……困まれている。そんな気がします。敵はアサシン一人では無

いという事でしょうか』

キャスターは自身を、正しくは自身のマスターを狙う影が増えているのを察した。

どこに潜んでいるのか、どうやって攻めてくるのかまでは分からない。
「ただ、立ち止まる。」

逃げるのを止めざるを得なくなった。

逃げ道はないと、これ以上進めばかえって危険だと。

『……マスター？』

キャスターは「警戒を保ちながら、返事の無い未来を気にかける。無言、無反応。」

いや

「……敵は全てアサシンのみ。宝具の影響で分裂しているだけ」

返事はあった。

ただ、それが酷く無感情で、機械的で、誰の声か判断するのにも時間を要した。

目は瞑り、全身からも力が抜け落ちている。

それでも、口だけがわずかばかり機能し、声を伝えている。

未来の意識はまだ記憶の海の中。

記憶を漁り、自分とキャスターを狙うアサシンに関する未来を探している最中。

その過程で、情報が漏れ出ただけに過ぎない。

「……都合よく利用され、ただの捨て駒として終わるだけの存在」
淡々と未来を告げていく。

「……戦闘面においては」

「マスター!!」

未来の呟き。

それを遮る形で、キャスターは叫んだ。

念話ではなく、その口で。

張り詰めるように。

辺りに響かせるように。

「うっ……、あれ、ここは？」

「しっかりとしてください、マスター。目下アサシンに狙われている最中です」

キャスターは、飛び交う短刀をよけながら言う。

寝ぼけている、いや混乱している未来に対して。

現在は、防戦一方どころか、追い詰められた行き止まりで足掻いているような状態。

あのまま放って置けば、状況を打破できる何かが告げられたかもしれないというのに、キャスターはそれより未来の安否を優先した。明らかに異常で、おかしかった未来を。

今を見失いかけていた未来を。

慣れない事はするべきではない……そんな言葉がある。

未来は正にその言葉が当てはまるのかもれない。

制御もできないくせに無理やり、本能を抑えて未来視を意図的に起こそうとした。

その結果、未来は観えたが、あまりにも多い情報量。

自我すらも忘れさせてしまいそうになるぐらいのそれに、未来は理性を保てず、思い出すという事だけに専念した

ただただ未来を思い出し、観るだけ。

壊れたビデオデッキのように、延々と。

「あ…… そうだった」

ようやく現状を思い出した未来は慌てる様に自分が観た情報を知らせようとした。

今も覚えているのは、観た大量の未来の中のほんの一部だが、それでも有用なはずだと。

しかし、その言葉は放たれる前に遮られた。

何によってか……それは簡単だ。

目の前の状況によってだ。

「キャ、キャスター!？」

「……大丈夫です。掠っただけです」
キャスターのわき腹辺りから血が流れ落ち、未来の視界が赤を映す。

「ですが このままではまずいですね」
キャスターは未来を肩から下ろす。

その動作は、すきだらけであり、未来を庇うように立っているキャスターの背中へと短刀が突き刺さり、また赤を増やす

「出来ることなら、最後まで私があなただを守り抜きたかった」
キャスターは背を向ける。

小さなはずの背中が、やけに大きく感じた。

「おい……」

未来はキャスターが何を言い、何をしようとしているのか分からなかった。

「どうかご無事で」

両の手を合わせて握り、天へと差し出すキャスター。

その姿は、さながら祈りを捧げる乙女のように、儂げで、美しいかった。

「どうか……」

そして紡がれる。

「ソルシエル・オブ・オルレアン
創られた虚構の魔女」

彼女の逸話によって生み出された宝具。

その解放を告げる言葉が。

創られた虚構の魔女

呪詛のような響きに乗せたその言葉に呼応して、キャスターの身が黒い炎で包まれる。

それは攻撃的なモノではなく。

闇を照らすどころか、闇に溶け込み混ざり合う。

キャスターの心に宿る眩いまでの光さえも呑み込み、闇へと変えていく。

徐々に、刻々と、確実に。

透き通りそうな程に白い肌も、金の髪も、陰りを含み、甲冑は漆黒へと。

心身共に闇を纏い、黒で染まった姿。

オルレ안의魔女

そう彼女は口にした。

本来魔術師でもない彼女はキャスターとして召還されるはずがなかった。

だが、悲しくも彼女にはキャスターとして召還されるには十分な伝承があった。

民をたぶらかした魔女。

かつて百年戦争においてオルレアン解放に貢献し、フランスへと勝利をもたらしたオルレ안의乙女は、魔女の疑いをかけられ、結果宗教裁判により異端者として断罪、炎に焦がれて灰となった。

キャスターとして呼ばれたのは聖女である彼女ではなく、魔女としての彼女。

伝承が生んだ、偽りの姿。

宝具を解放した今、彼女は魔女であり、属性もステータスも、先程までいたキャスターとは異なっている。

伝承を利用した存在の上塗り。

それが、キャスターが使った宝具の力。

聖女たる彼女は、魔女たる彼女に上塗りされ、こうして変貌を果たした。

「さて、下賤な暗殺者どもよ。まだ続ける気ですか？」

凜とした声が、潜むアサシン達に向けられる。

キャスターの身体に傷は無く、逃げの一方だったのが打って変わって堂々と立ちながら、挑発めいた空気を放つ。

アサシンが未来に狙いを定めたのは、このような幼子など容易く葬れるという判断を基に、戦闘能力の低いキャスターがサーヴァントであるという要素が加わったもの。

しかし、元々はあの初撃で仕留めるはずであった。

それが、阻止され、追撃も回避。

ようやく追い詰めたかと思ったところでの宝具の使用。

指摘するまでも無く、アサシンの失態。

せめてもう少し、アサシンにも攻撃力があれば結果は違ったのだろうが、キャスターと並んで戦闘能力の低いアサシンだ、キャスターも凌ぎきる事が可能だった。

「……ええ、それが利口です」

負けるつもりは無いと、まだ奥の手があるとでも言うようなキャスターを前に、暗殺者達は姿を消していった。

撤退。

追い詰められていたはずの未来達がいつの間にか、優位の立場に立っていたかのように。

事実真名を悟られるのが必至である宝具を使用していたのだ、情報を引き出すためにあえて捨て駒となるのも手の一つだが、これ以上事を大きくしてしまえば、アサシンが敗退しているという偽装は厳しくなる。

誰にも見られていなかったのは幸いだっただろう。

それは未来にとっても同様。

「助かった……のか？」

「ええ、マスターの命を脅かす奴らはもういません」

雰囲気は違うながらも、キャスターは相変わらず未来をマスターとして接する。

それが余計に違和感を感じさせる。

「……キャスター、だよな？」

「ええ、別人に見えますか？」

見える……そう意を含む沈黙。

キャスターであつて、キャスターでない。

「まあ、マスターがそう感じるのも致し方ない事ですが……詳しい話は後にしましょう。長居は無用、他の敵共に見つかる前に帰宅された方がよろしいのではと」

そういうと、キャスターはある点に視線をやり、何かを呟いた後に、霊体化した。

難を逃れた……そう楽観視しても良いのだろうか、未来は心が晴れないまま、家に向かった。

「しかし、本当に監視されていたとはな……」

随一の気配遮断を誇るアサシン。

それにいつからか目をつけられていた事に、驚き半分で感想を述べた。

既に未来はいつもの冷たさを取り戻しており、感情的とは言い難い。

それでも気になるのが、自分の目の前に鎮座するサーヴァント、キャスター。

未来がマスターだとバレるといけないので、この家には近寄らないと言っていたのだが、今は部屋に未来とともに押し入り、ベッドに腰を下ろしていた。

「これまた、常に直立を保っていたキャスターらしくない仕草。……それも霊体の状態で。」

「大丈夫ですよ。監視はしっかりと撒いておきましたから」
心でも読んだのか、未来の言葉を先読みして、答えを述べるキャスター。

「それに、私の気配も感知しにくいように細工はしてあるとはいえ、外をうろついていれば、またいつあの暗殺者共に捕捉されるかわかりませんからね」

「……細工？」

「ええ、簡単な魔術です」

さらっと述べたその事実。

その二文字を脳の中の記憶から探り出し、色々と余計な事まで引きずり出してしまったが、確かな記憶を思い出す。

私は魔術師ではありません

魔術は一切使えないと言う事です

そう、出会った際にキャスターは言っていた。

だから、自分がキャスターなのは、聖杯が間違えたからではないかと。

「魔術、使えるのか？」

「ええ、一体何を今更。私はキャスターですよ？ キャスターが魔術を使えない道理がありますか？」

このやり取りでもう十分だった。

目の前の彼女と、記憶にある彼女とは明らかに違う。

「……一体お前は」

「あ、さつきから気になってたんですが、念話で話したほうが良いですよ。もう夜も遅いですし、ご両親も色々な意味で心配するのでは？」

「……さつきと言ってくれ」

夜が遅いから、声を上げていると迷惑だというのもあるが、それ以上に、こんな時間に独り言を、それも誰かに話しかけるように行

っているのを聞かれたら、変な勘ぐりでもされそうだ。

霊体であり、未来に念話で直接はなしているキャスターの存在は、傍目には映らないのだから。

それに、声が外に漏れて、それを偶然通りかかった聖杯戦争参加者が耳にするなんて間抜けな事態も起こりうるので、会話は出来るだけ念話のほうが良い。

『で、もう一度聞く。お前は何者だ？』

『キャスター。あなたのサーヴァントですよ』

『しかし、僕の知るキャスターは魔術を使えないはずだ。そうキャスター自身が言ったんだ』

『ああ、その時は本当に使えなかったんですよ。と、いうよりあれは仮初の姿でしかありませんでしたから』

『……仮初？』

『ええ、先ほども述べたでしょう。魔術を使えない者が、キャスターに選ばれる訳がありません。ですから、魔術を使えなかったあの時は色々と間違っていたんですよ。今の私が、本当の私です』

聖女ではなく、魔女である自分が正しい。

そう主張しているようなものだったが、キャスターの伝承を知らない未来はそこまでは察せず、二つの姿と性質がキャスターにはあるのだと判断した。

『戻れないのか？』

『……戻る必要がありますか？』

問いに問いを返すキャスター。

未来だって薄々感づいてはいた。

出来ることなら、最後まで私があなたを守り抜きたかった

あの時、変わる前のキャスターが残した言葉。

それはつまり、こういう事なのだろう。

これから自分は、自分でなくなると。

もう戻れないと。

「……そうか」

あえて口に出してみた。

なんとなく、その方が気持ちを表せる気がしたから。

心の中のもやもやとする違和感。

心が一向に晴れない。

彼女となら、もしかして。

そう思った。だけど、その彼女は変わってしまった。

もういない。

これから、はたしてどうするべきなんだろうか　と、未来は誰に言うでもない、心の中だけで呟き、キャスターに背を向けて、ベッドに横たわり、目を瞑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2637y/>

Fate/Zero ~未来を観るモノ~

2011年12月2日01時45分発行